
バカとテストと本屋さん

由里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと本屋さん

【Nコード】

N1633U

【作者名】

由里

【あらすじ】

永瀬夏樹は木下優子に恋してるっ！！

本屋の息子が色々と頑張るかもしれないお話です。

バカテストなのにコメディ少なめの純愛。

主人公はCクラスなので原作とは大筋は同じですが、色々と違います。

Fクラスで似たようなコメディに飽きた方、ご都合主義にも飽きた方、是非どうぞっ♪

ちなみに、文系作者（浪人生↑勉強しろ）が書く小説でございます。

予習問題（古典・和歌）（前書き）

基本的に問題は飛ばしても大丈夫です。

予習問題（古典・和歌）

予習問題（古典）

次の和歌を訳（解釈・意識でも可）し感想を何でも述べなさい。

「恋ひ恋ひて 逢へるときだに うるわしきこと 尽くしてよ 長
くと思はば」

吉井明久の解答

意識「恋しくて恋しくて 逢えたときだに うるわしいって言葉を
言って 長くと思わないならば」

感想「何で長くと思わないのに、うるわしきことなのかがわかりま
せん」

教師のコメント

「意外とまともですね。直訳でもある程度大丈夫だからでしょうが。
ただ、「だに」と「うるわしき」「長くと思はば」の解釈が減点で
すね。「ば」には否定の意味はありません。ただ、感想での疑問に
はびつくりしました」

木下秀吉の解答

意識「恋しくて恋しくて 久々に逢えた時くらいは 愛しいを尽く

してください 長くと思うならば」

感想「何か、友人を見てる気がするのう」

教師のコメント

「惜しいです「こと」と「尽くしてよ」だけです。これから頑張ってください。友人とは誰でしょうか。気になりますね」

永瀬夏樹の答え

「愛しい貴方に、やっと逢えた時くらいは 私に愛の言葉をたくさん囁いてください。貴方が私と長い時を過ごしたいのなら」

感想

「僕はこの歌が一番好きです」

教師のコメント

「意識ですね。完璧です。」

知識として書くならば、出典は「万葉集」で、作者は^{おおとものさかのつえのい}大伴坂上郎女^{らうめ}です。

彼女は^{たびと}大伴旅人の異母妹で^{やかもち}家持の叔母にあたります。

また、この歌は坂上郎女が^{おとこいひつめ}二嬢の代わりに、婿に贈ったものであるとされています。

愛しい人に甘えるように詠みながら、それでいて最後に釘を刺すかのような一言。「私に構ってくれないのなら、考えがあるわよ」と、言外に示しているような気がしますね」

補足。

「恋ひ恋ひて 逢えるときだに うるわしきこと 尽くしてよ 長くと思はば」

だに＝さえ（逢えた時さえ）また（逢えた時くらいは）。ここではさらに、「せめて逢えた時くらいは」のニュアンスを含む。
うるわしきこと＝ここでは「愛の言葉」

こと＝言の漢字をあて「言葉」

尽くしてよ＝を（たくさん）してください

思はば＝思ふのならば

直訳

「恋しい人に 逢えた時くらいは （私に）愛の言葉を言ってください。（私と）長くいたいと思うなら」

予習問題（古典・和歌）（後書き）

読んでくれて、ありがとうございますっ ♪

感想、批評、古典で知りたいことなどありましたら気楽に気軽にどうぞっ！！

そのいちっ（前書き）

基本的に短いです

そのいちっ

「ねえ、秀吉はクラスどこだった？」

文月学園の始業式、たまたま僕は廊下で秀吉に会った。

「わしは……Fじゃった。お主は？」

秀吉のクラスを聞き、Fという予想はしていたが、悲しくなった。少し真面目に勉強すれば、ほとんどの人がEクラスには入ることができるからだ。

まあ、秀吉は演劇に熱中していたから、多少仕方ないことなのかもしれないけれど……

「僕はCクラスだったよ。国語はいつも通りできたんだけど、理数系がね……」

「夏樹の理数系の点数はわし未満じゃからな。それでもCクラスとは中々じゃのう」

あの人と似た顔の秀吉に褒められると、嬉しいようでちょっと複雑。秀吉はどんなに女の子に見えても男なのだから。秀吉の性別は秀吉と言われている。だが、彼はちゃんと男子だ。

それに、秀吉であり、決して優子じゃない。

「ふふ、秀吉にそう言われると嬉しいね」

「おや、夏樹。本当は姉上に言われたいのじゃろ？ 顔に出ておる

ぞ」

まさに、凶星だった。

「……うん。だけど、無理だよ。優子はAクラスで僕はCクラス。秀吉みたいに演劇に集中してるわけでもないから、そんな要素はないよ」

「でも夏樹はわしとは違って勉強しているのじゃろう。いくら姉上でも努力している者を褒めないことはないと思うのじゃ」

確かに、秀吉が優子にちょっと言えば、僕は褒めてもらえるだろう。

でも、僕は誰に言われたから仕方なく褒められるのではなく、優子自身の意思であって欲しいと思っている。

「結果の出ない努力なんて無価値とは言わないけど、無意味だよ。結果が全てだからさ」

それは、僕の持論だ。例えば、テスト一週間前から毎日10時間勉強したとしても、赤点を取ったら補習行きになるように。

「むう。難しいやつじゃな。もう少しポジティブになれんのか？」

「僕もそう思うよ。でもさ、それでも前よりはマシになったんだよ？」

「そう言われたら返す言葉がないのう。昔、と言っても2年前は今のみたいに話せなかったしの」

そう、昔の僕は人見知りが激しく、必要な時以外は家族と話すことがほとんどなかった。今でも、自宅の本屋で店番をしていた時、お客様――優子に初めて話しかけたことが奇跡にしか思えないからでも、それがあつたからこそ、今の僕がいることも事実なんだ

「本当に優子と秀吉には感謝しているよ」

「わしと話しているのに、そこで姉上の名前が先に出るのは夏樹らしいのう。まさに姉上にベタボレじゃな」

「……うるさい」

やっぱり凶星だから、僕にはそんな言葉しか返すことができなかった。

「ほれほれ、顔が真っ赤じゃ。熟れた林檎もそこまで赤くはないぞよ」

秀吉は僕の頬を指で何度かつついた。それだけなのにそれは僕の頬より冷たいのがわかってしまった。

「……そんなに赤くないって」

「嘘はよくないのじゃ」

ずっと、手鏡を出されたので覗いてしまった。

「……うそ」

「ほんとじゃ」

そう、僕の頬は本当に真っ赤に染まっていた。頬だけではなく、耳までもが。

「ほっほっほ、わかったじやろう？ さて、と。そろそろホームルームの時間じゃな。ほれ、教室に着くまでにその顔をなんとかせねばならんぞ？」

「わっわかってるよっ！」

そう言っつて秀吉はさっさと教室に向かったので、僕は洗面所で顔を洗い、熱い顔を冷やすことにした。

そのいちっ（後書き）

これからまったりとよろしくお願いしますね。

第一問（古典・御髪おろし）（前書き）

飛ばしても全く問題ありません。
興味のある方はどうぞ。

第一問（古典・御髪おろし）

『を訳（解釈）しなさい。』

（尼のように暮らしていた女性は）その君、生まれ給ひてのち、
ひたぶるに頭おろして、『法師のやうに行ひて、……』

出典「浜松中納言物語」

吉井明久の解答

「ひたすら土下座しまくって」

教師のコメント

「ひたすらがとれている分シユールな訳になりました。ひたすらでも今回は間違いですがね」

14

木下優子の解答

「全てハゲにした」

教師のコメント

「間違っではないんですけど……。言葉遣いを良くしましょう」

久保利光の解答

「全ての髪を剃り落として」

教師のコメント

「流石ですね、正解です」

解説

訳

すっかりと髪を剃り落として

「ひたぶるに」は意味に「一途である」「ひたすら」「むやみやたらである」などがあり、今回は「頭おろし」から「むやみやたら↓あるもの全て」と考えて「すっかりと」髪を切ると解釈します。

「頭おろし」は最重要単語で「髪を切り出家する」「剃髪する^{ていはつ}」の意味です。

法師（坊主）の髪の毛はありませんよね？

だから、髪のない状態にすること＝出家することになります。

ただし、ドラマなどの影響で勘違いしがちですが、尼（女の坊主）の場合は全ての髪を切る必要はありません。

今回は珍しいパターンで女性が全て剃り落としていますけどね。

昔の女性（貴族）の髪の長さは地面に届くのが当然でした。と

ある話ではおよそ20m以上の髪をした女性も出てきます。

髪の長さ＝その女性の美しさなのです。

出家には肩口くらいまで髪を切るだけで十分です。

現代のショートカットの女性がいますよね。彼女がもし古典の世界に行ったら出家している状態（尼）ですよ。

また、「御髪下ろす^{みぐし}」「髻切る^{もとい}」「かたち（姿・様）変ふ」「世

を背く（のがる・離る・出づ」「身をやつす」も全て出家の意味です。

全訳

女性のお子様が、生まれなされた後に、（女性自身の）髪の毛をすつかりと剃り落として、（女性は）法師のようにお勤めに励んで、……。

（ ）は人物を示すために入れただけなので、通常要りません。

給ふ＝尊敬語、（動詞の連用系について）ゝなさる。

おこなひ＝仏道修行（勤行）

第一問（古典・御髪おろし）（後書き）

疑問やわからない点などがあれば、気楽に気軽にどうぞっ
♪

そのにつ

何度も顔を洗って、熱を冷ましてから僕は教室に向かう。熱さはなくなっただけ、洗いすぎて赤さは消えないという失敗をかましてしまった……

優子にあることないこと適当に言っ、秀吉の関節を逆にしてもらおうかなと本気で思っ、てみたりもする。

まあ、あることないこと言えるほど、僕は口が達者ではないから無理だけどさ。

語彙力があるのと話術があるのは別な話だから。

教室に入っ、て見渡す。知り合いはいないかの確認だ。交友関係がものすごくしょぼい僕だから、当然のように知り合いは誰もいなかった。Aクラスならば、優子と久保くんがいるのになと思っ、てしまっ、う。

久保くんとは去年同じクラスで、よく英語を教えてもらっ、ていた。彼に教わるとき、たまに何やら妖しい視線を送られたけど、それ以外はとても良い人だっ、たと思っ、……多分。

もっ、う一度クラスを見渡すけど、やはり誰も知り合いはいない。これはもっ、う、読書確定コース？

運良く目立たなそうな自分の席につ、き、バッグから早速小説を取る。

朝、適当に本棚から抜き取っ、た本で、僕はまだタイトルを見ていなかった。

何か楽しい本だといっ、いなっ、て期待を込めながら、表紙を見る。

そこには――

『人間失格』 太宰治

これは - - 酷い。

一気にテンションが下がってしまった。

それはもう、後ろ姿で優子だと思って話しかけたら、女装した鉄人先生だったみたいなのカンジだった。

後ろ姿でも絶対に間違えないと直ぐに気づいたけど、それくらいシヨックなのだ。

新学期早々嫌な予感しかない。ネガティブな僕がこれ以上ネガティブになってどうするのだ？

気を紛らわせるために、教室の設備などを確認する。

まだ埃の落ちていないキレイな床。普通よりちょっと大きめな机とイス。ちゃんとした空調。

真面目に勉強できる空間だとわかったら、それだけで気分がマシになった。

どうやら僕はテンションがかなり下がりやすいが、少しだけ回復しやすいようだ。

カラカラと軽い音が立ち、前のドアが開き、担任の先生らしい人が入ってきた。

丁度、始業の音も鳴ったので、全員が席についた。

それからはCクラスについての説明、勉強の指針とか普通なことばかりだった。

そして、僕が苦手な、自己紹介になった……

一人、また一人と自己紹介を済ましていく。みんな普通に言うことができてすごいと思う。

僕の番が少しずつ、しかし確実に近づく。何を言うかは昨日の夜に練習したし、噛まないかどうかは電話で秀吉や久保くんに確認してもらった。

緊張しない方法だつて秀吉に教わった。

みんな、野菜だと思えばいいんだ。

そう、僕の周りにいるのは、人じゃあないんだつて。

前にある横に広いのはキャベツ。右前の真っ黒いのはゴボウ。そして、隣にある白くて細いのはモヤシなのだ。

大丈夫だ、大丈夫だいじょうぶ、大丈夫、大丈夫大丈夫大丈夫。

僕はやれば多分できる子。

「次は永瀬、よろしく」

教壇に立つガツシリと育った大根に指示されて僕は小さく一呼吸して立つ。

「……永瀬夏樹です。趣味は読書で、得意教科は国語と家庭科。苦手教科は理数系全般です。えと、みなさんと切磋琢磨していきたいので、よろしく願います」

「はい、ありがとう。じゃあ次、仁科よろしく」

なんとか終わることができた。少しはマシになったけど緊張してたせいで、握っていた手は汗で濡れていた。

僕は心の底から秀吉に感謝していた。彼のおかげで無事に乗り切ることができたのだから。

……今度演劇の本をプレゼントしよう。

全員の自己紹介が終わり、人間失格を読んでネガティブにのんびりとしていたら、外が騒がしくなっていた。

「おいっ！ FクラスがDクラスに宣戦布告して午後から開戦するらしいぞッ！！」

Fクラスが何故？ と、僕は小さな疑問と大きな不安を抱いた。

そのにつ
(後書き)

主人公はネガティブです。

そのさんっ（前書き）

ちよっとリアルな話が出ます

そのさんっ

「もし、FクラスがDクラスに勝ってしまった場合、またはDクラスがFに勝った場合、次に戦うのは私たちかもしれない。だから、全員テストで得点を補給してください」

Cクラス代表の小山さんの指示によって、僕たちはテストを受けた。Fクラスが勝つということは全く想像できないのだけど、宣戦布告をするくらいだから、何か秘策があるのかもしれない。

それに、DクラスがFクラスに勝った場合、勢いづいてCクラスに挑まないという保証は全くないのだ。

また、僕たちがBクラスに挑むことがあるかもしれない。

みんなそれを理解しているのか、誰も反対せずにちゃんとテストを解いていた。

僕は数学、理科、英語、世界史、国語の順番で受けていた。正直、理数系教科を受ける意味があるのかと聞きたかった。

だけど、いくら点数が採れなくとも、テストを受けずに、理数系教科で挑まれた場合、0点扱いになり必然的に戦わずして補習行きになってしまう。

一通り、テストが終わり誰かと話すわけでもないから、僕は暇を持て余していた。

丁度その時、ポケットに入っていた携帯が震える。メールでも着たのだろう。

そして、携帯を開いてメールを確認すると、

From 木下優子

『新しいクラスは大丈夫？

まあ、あんたのことだから誰とも話せてないんだろうけどね。

この後暇だったらこっちに來て食事を取りなさい。そっちよりは
多分快適よ』

画像が二枚添付してあったからそれを見ると、Aクラスの教室だった。

一枚目は全体の様子で、教室前面に大型スクリーン（電子黒板）があり、一人一人の席には余裕もあった。ついでに、端っこには久保くんらしき人も映っている。顔半分が見切れていてホラーだったけど。

……とにかく、Aクラスはどこかの高級ホテルを思わせるものだった。もちろん、僕は高級ホテルになんか行ったことはない。

二枚目は個人デスク周辺部を写していた。個人用のエアコン、開かれた冷蔵庫には中に飲みかけペットボトルとお菓子（優子がわざと開いて撮ったのだろう）、ノートパソコン、座り心地（寝心地）の良さそうなりクライニングシートまである。

「すごいな」

思わずそう呟いてしまったのはきつと、いや、絶対に仕方のないことなのだ。

そんなことより、返信しないと……

『ありがとう。』

まあ、うん。優子の予想通りだよ。

もちろん、行かせてもらいます』

- - 送信。

そんな短い文を打つのに三分くらいかかってしまった。別にメールを打つのが苦手な訳ではない。秀吉にするならば、一分もかからないだろうから。

「なぐに携帯見ながらにやにやしてるのかな？」

突然話しかけられ、僕はビクリと反応してしまった。

「えっと、小山さんだよな？ どうしたの？」

なんとか冷静になり、僕は聞いた。

「私はねこのクラスの代表だからさ、先生から個人の成績を教えてもらってるの。ほら、試召戦争があるでしょ？ その戦力を把握するのよ」

プライバシーも何もあつたもんじゃないけど、成績を知られたくらいはどうでもいい。日頃の生活の結果が出ているだけなのだから。

スポーツに特化しているEクラスや、演劇に心血を注いでいる秀吉のように何か事情がない限り、どのクラスにいるかということ、この学校では人の価値がある程度決まってしまうと言ってもいい。

もちろん、僕は学力が全てなんて言う気は全くない。しかし、学力も人物を判断する大きな要因になることも真実であるから。

そう、テストの得点とは、天才という例外を除き、その人がどれだけ努力をできたか、ということである。

だから、Aクラスにいる人は努力をちゃんとした人、性格はどうあれ真面目な人と判断され、下位クラスは努力さえできない人間だと判断されてしまう。

「うん。何で僕に？」

「永瀬くんはね、国語の成績がトップなのよ。それこそAクラスの上位に匹敵する程にね。だから、いざという時は頼るかもしれないってことを伝えたかったの」

「わかった。今のうちに伝えてくれてありがとね」

小山さんはかなりキツいという噂があったけど、案外そうでもないのかもしれないと思った。

まあ、これが猫をかぶっていたものだとしても、上辺の付き合いだけだから全く問題ないと思う。

「さて、それは良いとして……何でにやにやしてたのかなあ、おねいさんに教えてくれない？」

……前言撤回。

「えっと……それは……」

それから僕は色々と質問（尋問と言い換えてくれてもいい、むしろそっちが正しい）され、くたくたになった。

後になって、小山さんはクラスに慣れていない僕に対して、安心させるためにわざとからかったんだと気づき、ここで頑張ってみようかと、Cクラスが少し好きになった。

そして、小山さんに対しての前言撤回を撤回することにした。

そのさんっ（後書き）

一流企業が何故、上位の大学から卒業した人間を採用するかの理由の一つを書きました。

上位の大学を卒業する（勉強をしてきた）＝努力ができる人間である。

つまり、入社してからも努力ができると判断されるわけです。

バカテスという、学力を利用した小説なのに、学歴社会について何も書かないで流したくはなかったのです。

小山さんの性格についてですが、原作にて、相手の心理を突いた作戦を使えるということは、相手の感情について理解し、適切な対応ができるということです。

よって、クラスメイトに対しては団結力を高めるためにも気遣いをする。

結果、原作よりも小山さんの性格が丸く見えるということです。

あ、姉御キャラっぽかったり、口調が多少違うのは私の妄想です。

感想や批評がありましたら、気軽に気楽にお願いしますね。

あとがきが長くてすみませんでした。

そのよんっ（前書き）

ネガティブ夏樹全開ッ！

そのよんっ

Aクラスの教室を前に、僕は驚いていた。

優子から送られてきた写真で大体の大きさを想像していたのだけ
ど、僕の予想を簡単に上回っていた。

朝は秀吉と話しながら歩いていたら全くAクラスを見ていなか
ったのだ。

「どうしよう……これ、僕なんかが入っていいところじゃないよ
……」

- - 世界が違う。

溜め息混じりな声は震えていた。

もちろん行くとか返信したくせに、僕は今更怖じ氣ついている。

「……どうしたの？」

振り返ると、そこには美少女がいた。

まさに - - 花の顔 かんはせ

長い髪だけでなく、澄んだ声も雨によって濡れたかのように、彼
女は彼女の全てを利用して艶を表現していた。

利用していることが意識ではなく、無意識ならば、尚更彼女は艶
なのだろう。

彼女のつけている薄い香水がふわりと香り、僕の鼻腔を刺激する。
そして、彼女の大きな目には何もかも吸い込んでしまいそうなほ

ど深みがあった。

誰かと比較することは彼女に失礼になるだろう。
さつき、美少女と一言で表現したことさえも許されないだろう。

それ程までに彼女は - 華だった。

「Aクラスに何か用事があるの？」

「あ、あの、僕は、木下さんに、誘われて……」

しどろもどろで僕はそう返す。

だって仕方がないだろう。僕は生来人見知りの性格であるし、こんなに綺麗な人から話しかけられているのだから。

「そう……、なら、入れればいい。別に危ないところなんかじゃないから」

「……うん」

「あと、優子の席はわかる？」

僕は無言で首を振った。咄嗟に声が出なかった。

「わかった。じゃあ、ついてきて」

教室に入り、Aクラスの人に見られているのがわかると、僕は自分の体が小さくなればいいと思った。穴があつたら入りたい、穴が無いならば、掘ってでも入りたい - いや、逃げ去りたい。

でも、優子には会いたかった。別に会おうと思えばいつでも会える。彼女の家に行きさえいいという簡単なこと。

だけど、今、ここから逃げてしまったら、ダメな気がした。そんなことでは、優子に逢う前の、今までの僕と全く変わらないではないか。

僕は彼女に逢って変わったはずじゃないのか？ 変わったんだろ？ どうなんだ？

…… 自問自答、答えは簡単だった。

そう - - 変わったんだ。

だったら、震えるな、ちゃんと顔を上げる。前を向け。

そう決意すると、心がすっと軽くなった。

「ありがとう」

「……？」

「話しかけてくれなかったら、僕はここに入ることはできなかったから。本当に、ありがとう」

「そう、なら、どういたしまして」

そうして、僕はやっと優子の席までたどり着くことができた。

「あ、来たわね。翔子がここまで連れてきてくれたんだ。教室の前で固まってたでしょ？」

僕の行動なんて優子にはお見通しだったみたいだ。

「予想できてたなら、待っていれば良かったのに」

「まあまあ、細かいことは気にしないの。あ、この子の名前は永瀬夏樹ね。ほら、学園近くに永瀬書店ってあるでしょ？ その一人息子」

「Cクラスの永瀬夏樹です。よろしくお願いします」

優子に名前を紹介されたので、改めて自分でもした。

「……霧島翔子、一応このクラスの代表。よろしく」

「つまり翔子は二年で一番頭が良いつてこと。私でも追いつけないくらいなのよ。あ、夏樹も翔子も座りなさい、あたしだけ座って、二人ともずっと立っていると、なんだか無理やり立たせてるみたいじゃないの」

そう言っつて優子は座り心地が良さそうなイスを二つ指差した。……なんで三つもイスがあるのだろうか？

疑問は今は無視して、とりあえず僕は座ることにする。うん、やっぱり柔らかい。

「さて、自己紹介なんて面倒なことはそれくらいにして、お昼ご飯を食べよ？ 夏樹を待ってたからお腹空いちやっただ」

そうして僕たち三人でお昼ご飯を食べることになった。

男子一人で女子二人、見る人が見れば、僕はやられてしまうんじゃないだろうか？

そんなことを考えられるくらい余裕があることに気づくと、僕は
ちゃんと変わったんだと小さな実感を得ることができた。

そのよんっ（後書き）

読んでくださってありがとうございますっ
っ

そのうっ（前書き）

ほのぼのぱーと

その111

「今日の昼食は何なの？」

優子は僕が持っている袋を期待に満ちた目で見つめていた。奪われる確率100ぱーせんと。数字を見ると頭が痛くなりそうな僕でもわかった。

「サンドイッチだよ。まだ春だから生クリームとジャムを挟んでみました」

サンドイッチなら誰が作っても失敗することはないはず。別に僕は料理が苦手なわけでもない。むしろ、家にある売れ残りのレシピ本を読んで作っていたから得意な部類だ。

「へー、そう。代表、生クリームだってさ、きっと甘くて美味しいよ」

優子は天使のようで意地の悪い子悪魔な笑みを浮かべていた。言葉にするならば「代表にお裾分けしないと、どうなるかわかってるんでしょうね、このヘタレ」だ。

・・・何、この虚しさ。

「……人の昼食を取っちゃダメ」

「あ、大丈夫です。優子に渡すと思ってたから多目に作ってます」

まあ、優子から誘われなかった一人で食べていたと思うけど。いや、小山さんに取られるかな……

よし、彼女には今日のお礼に帰ったらクッキーでも焼こう。ついでにCクラスのみんなに渡しても良いかもしれない。

「……私が食べてもいいの？」

「もちろんです」

袋からラップに包まれたサンドイッチを一つ、霧島さんに渡す。生クリームにイチゴジャムを混ぜ込み、春らしい桜色にしている。優子には生クリームとブルーベリージャム入りのを渡した。

「じゃあ遠慮なく頂くわ」

「優子には遠慮なんて期待してないよ」

サンドイッチを口一杯に頬張った状態で睨まれたが、あら不思議、全く怖くない。むしろ、ハムスターやリスみたいで可愛いと思う。もちろん、本人には言わない（言えない）けど。

優子の視線は気にせず、僕もオレンジマーマレードジャム入りのサンドイッチを食べ始めた。自分が食べるのには生クリームは入っていないのだ

「これ……美味しい」

「それは作った甲斐があります」

霧島さんの片言ながらも、しっかりと一言に僕は嬉しくなる。

ほら、こんなに綺麗な人に褒められて嬉しくないはずがないでしょう？

「代表に言われたからってにやにやしないの。まあ、確かに美味しいけど」

あ、もう一つもらうわね。と、優子は自然に手を袋に突っ込んだ。

「どんどん食べてね。たくさんあるから」
「私も、いい？」

「どうぞ」

次はリンゴジャムを混ぜ合わせたやつを渡した。リンゴジャムは甘過ぎないから食べやすいのだ。

「そう言えば、ジャムも手作りなんだっけ」

優子が桃ジャムサンドを食べながら呟いた。

「そだよ。暇な時に作ってる」

片手で読書をしながらでも作れるので、僕は気に入っている。砂糖の量などで甘さがある程度なら調節できるし、売り物みたいな添加物は一切入っていない。

「自分で作れるんだ。すごい」

「ありがとう、でもね、調子に乗って作り過ぎちゃったから、家に沢山未開封の瓶があるんだ」

没頭し過ぎて、買った瓶（20個くらい）全てに作ってしまったのだ。幸い、ジャムは瓶を密閉することができるから、一度開けない限りはかなり長持ちする。

「へー、じゃあさ、あたしどこに分けてくれない？ 秀吉もきつと喜ぶと思うのよね」

秀吉を盾にただけで、全部優子が食べちゃいそうな気がする。まあ、沢山渡せば秀吉の口にも入るかな。

「わかった。今度渡しに行くね。霧島さんもよければもらってくれないかな？ 余り過ぎているんだ」

「ありがとうございます」

そこで霧島さんは微かに微笑んだ。僕の頬が少し熱くなった気がする。

「さ、今は食べて食べて。あ、そうだ。久保くんにはサンドイッチをおやつにでも渡しておいて。確か、久保くんはブルーベリーが好きだから」

ごまかしを多分に含め、周りを見渡しながそう言った。久保くんの姿は見えなかった。多分、学食の方に行っているのだろう。

でも、せつかくAクラスに来たのだから、僕の数少ない友人におも小さな裾分けしたいのだ。ごまかしに使ったけどね。

「わかった、却下ね。さあ、代表、食べ尽くすわよ」

「うん」

「え？」

それから、一切会話は無い。

二人が僕の何倍ものスピードでサンドイッチを食べるので、僕も自分が空腹を満たすために食べるので精一杯だ。

久保くん、ごめん。

明日くらいに優子たちに見つからないようクッキーを渡すよ。

僕は心の中でそう思いながら、サンドイッチをまた一口かじった。

そのごっ (後書き)

久保くん、どんまい。

そのろくっ（前書き）

ほのぼのぱ〜と伏線入り

そのろくつ

サンドイッチは全て食べ尽くされてしまったので、久保くんに渡そうとした分も当然なくなった。

正直、優子と霧島さんは二人とも僕よりも食べていた。いや、別に問題はない。

ただ、甘いものを目にした時の女性はやっぱりすごい。甘いものは別腹、その言葉をよく理解できた。ついでに、女性の恐さも。

そんな悲しいことを考えながら、僕はCクラスに戻る。

いつの間にかに、Fクラス対Dクラスの試召戦争は始まっていたようで、自習時間となっていた。

僕は自分の席につき、太宰治の「人間失格」を取り出し読み始める。

教室の外はバカ騒ぎをしているようにうるさい。試召戦争とはこんなものなのかと思った。

なるほど、試召戦争中は全クラスが自習時間になる理由もわかった。こんな騒音の中では授業に集中できるわけがないからだ。

だからこそ僕は本を読む。

僕の中だけの静かな時間が流れるから。

でも、そんな小さな幸せの時は長続きしなかった。

「Aクラスはどうだったかにゃあ？」

突然、肩をつつかれ声をかけられたのだ。

「……なんで猫？」

「気分よ」

小山さんだった。

僕は本を閉じ、机の中にしまった。これから解放されるまで読ませてくれないと思うから。

「まあ、楽しかったよ」

「そ、じゃあそれをＣクラスでもできるようにしなさいな。永瀬くんは見た目からして人付き合いが苦手だってわかるから」

- - 僕はそんなにわかりやすいのだろうか。

「わかりやすいのよ」

「あの……人の心を読まないで……」

「え？ ごめん、無理。顔に書いてあるのよ、僕はわかりやすいへたれネガティブ人間ですってね」

小山さんはとてもイイ顔をしている。お気に入りの玩具を目の前にした少女みたいだった。

「……それ、ナチュラルに僕を罵倒してないかな？」

「うん、してるよ」

僕。
またもや即答。ケラケラと楽しそうな小山さん、しょんぼりする

「あ、そうだ。小山さんはバタークッキーとチョコレートクッキーのどっちが好き？」

これ以上いじられたくはないので、僕は話題を変えることにする。

「甘いものなら何でもって言いたいところだけど、シンプルにバタークッキー。で、何でそんなことを？」

「なんとなくクッキー作りたいたい気分なんだ」

嘘だ。本当は小山さんと久保くに渡すため。もちろん、優子や霧島さんにばれた時を備えて大量に作るつもりだけど。

僕の中で霧島さんはお菓子好きな人と決定されたのだ。

「聞いてきたってことは当然、くれるのかにや？」

また猫……しかしおちゃらけた口調ながら、彼女の目は真剣^{マジ}である。やっぱり甘いものを目にした女性は怖いのだと、一日に二回も理解してしまった。

正直、理解したくなかった。

「もちろん。味は保証しないけどね」

「ならばよし。あつ、もしかして、おねいさんに恋でもしちゃったかな？」

あつはゝ永瀬くんたら可愛いんだからあゝ。と、小山さんは猫なで声で僕の耳に囁いた。

「ごめんなさい、小山さんの性格が把握できないです」

「だめよだめよ、おねいさんには一応、反吐が出るけど彼氏がいるんだから」

僕の言葉は簡単にスルーされてしまう。というか、小山さんに彼氏がいたことにびっくりだ。

- - いや、それよりも反吐が出るような彼氏って何さ？

「別にいてもいいじゃない。ついでに、根本っていう、陰険根暗人間よ。最初は卑怯なやり方も戦略だと思ってたんだけど、最近はその傲慢無礼なやつかと思ってるけどね」

「だから僕の心を……」

「さゝて、雑談はこれくらいにしましょう。こっちはこっちでこれからどうするか考えなきゃいけないのよ」

あいつとも話さないといけないしね。と、最後にそう言って小山さんはさっさと自分の席に戻ってしまった。

結局、彼女は何がしたかったのだろうか？ 考えても考えても全くわからなかった。

「おいッ！ FクラスがDクラスに勝ちやがったぞ！！」

数十分か経ち、Fクラスが宣戦布告をしたと伝えた人が、今度はFクラスの勝利宣言をした。彼は野次馬くと僕は頭の中で名付けた。

……野次馬くんのことはどうでもいい。Fクラスが勝ったという事態に、これから何か嫌なことが起こるかもしれないと思ってしまった。

嫌な予感ほどの中するものはないとわかっているのに、僕はそう思ってしまったのだ。

そのろくつ（後書き）

小山さんの性格が迷子。

もちろん、意図的です。

彼女は半オリジナルキャラ化します。

題二問（古典・恋歌はツンデレ）（前書き）

本気出して解説を書いてみた。
是非どうぞ。

題二問（古典・恋歌はシンデレ）

・問題文、始・

さて、男（藤原敏行）のよめる、

つれづれの

ながめにまさる

涙川

袖のみひちて

逢ふよしもなし

返し、例の男（在原業平）、女（業平の侍女）にかはりて（代筆して）、

あさみこそ

袖はひつらめ

涙川

身さへ流ると

聞かばたのまむ

といへりければ、男（藤原敏行）いいたうめでて、……以下略。

・問題文、終・

問「いいたうめでて」と男（敏行）がこう思ったのは何故か書きなさい。

*「いといたうめでて」は「たいそう喜んで」の意。

*侍女の代わりに業平が返歌を詠んでいるのは関係ない。

出典「伊勢物語」

永瀬夏樹の解答

「内容はどうかあれ、返歌があった時点で脈ありだと判断したから」

教師のコメント

「正解です。しかし、脈ありとは死語を使いましたね」

吉井明久の解答

「どMさんだから」

教師のコメント

「違います。が、その解答にたどり着くには、返歌の意味がわかっていければなりません。どうせ白紙だと思った先生を許してください」

解説

つれづれの

ながめにまさる

涙川

袖のみひちて

逢ふよしもなし

「ながめ」は「長雨」と「眺め」の懸詞。

「袖のみひちて」↓「袖さえもびつしよりと濡れる」

現代風な意識、敏行Ⅱへたれ風に。

「寂しさで、流れる僕の涙は袖さえも濡らしてしまいます。それでも僕はあなたと会うことができないのですか……」

返歌

あさみこそ

袖はひつらめ

涙川

身さへ流ると

聞かばたのまむ

現代風な意識、女（業平の代筆だけど）Ⅱヤンキー風に。

「は？ それだけかよ。てめエが私を思って流す涙はたかが袖を濡らすだけ？ 馬鹿じゃねえの？ 最低でもてめエの涙でてめエの体が流されるくらいになってから言いやがれ」

まあ、こんな風に冷たく返されています。しかし、よく考えてみてください。

本当に嫌いだったら、手紙の返事なんか書きませんよね？ 即刻燃やしますよね。

だから、返歌がある時点で相手が自分を想っていてくれることになるのです。

つまり、このヤンキー風な返歌の本心はこんな感じに表現できません。

「あんたの想いなんて全然しょぼいんだからっ！！ でも、私のことをもつと好きになるなら逢ってあげてもいいわよッ！！」

と、可愛いツンデレさんになります。

だから、別に敏行がどMさんで、罵倒されたから喜んだわけじゃないんです。

実は、平安時代からツンデレっていたんですよ（と言うか貴族はツンデレばかり）

それにしても、この返歌を書いた（代筆した）在原業平は気持ち悪いですね（だってむさ苦しい男がツンデレな和歌を書いたんですよ？）

まとめ

恋歌のやりとりは以下のように考えてください（現代のメール風）

男↓女「君を愛してるのにどうしてそんなに冷たいんだい（・ω・）？」（不如意を訴える）

女↓男「そりゃ、あんたの愛情がちっばけだからよ（ε、ε）もつと私を好きになってから出直しなさい（ノ／ω／ノ）」（愛情不足を指摘↓愛情さえあればOK）

男の心情（返歌キタ（・・）！！ 彼女も俺のことが好きなんだなッ）↑喜んで飛び跳ねる

と、返歌の内容が求愛を断るものであっても、返歌のあったこと自体が求愛を受け入れていることになるのです。

これが恋歌の基本です（もちろん、例外はありますが）

- 補足 -

「伊勢物語」

平安時代前期の歌物語（和歌を中心とした一話完結の短編集みたいなもの）

作者不明、しかし、主人公のモデルは在原業平と思われる。
色好み（恋愛）を中心としている。

題二問（古典・恋歌はシンデレ）（後書き）

わかりやすかったですか？

感想、疑問点などがあれば、気楽に気軽にお願いしますっ！！

そのななっ（前書き）

まったりぱーと

そのななっ

「おはようございます、てつじん先生」

「おはよう。……いつも思うが、それは敬っているのか、そうでないのかわからん表現だな」

てつじん先生 - 西村てつじん教諭に朝の挨拶をする。別に本名が『西村てつじん』なわけではない。

「もちろん敬意を込めてます。それはもう、神様を拝むみたいに」

『鉄人』という渾名をつけた人は、馬鹿ではないと僕は思う。

『てつじん』には『不死身の人・身体が強い人』の『鉄人』。

そして『学識が高く、優れた思想を持っている人』の『哲人』が掛けられているのではないだろうか？

生徒に一番恐れられているのと同時に、最も頼られている先生はてつじん先生だと思う。

だから、僕は西村先生を『てつじん先生』と二つの意味を重ねて呼んでいる。

「そこまでいくと、ますますわからんな。と、そんなことより、何だその馬鹿でかい袋は」

てつじん先生には『鉄人』の意味でしか聞こえていないだろうけど。

「あ、これですか？ クッキーですよ。良かったらてつじん先生もどうぞ」

かなり重い布袋の中から一つ、ビニール袋を取り出す。まだちょっと温かい。

「有り難い……もしや、その布袋の中全てクッキーじゃないだろうな？」

「え？ もちろんクッキーですよ」

えへん、僕はナイ胸を張る。いや、無くて当たり前なんだけど。……嫌な思い出がよぎってしまった。やだ、三途の川を渡りたい。

「胸を張ったり、落ち込んだり忙しいやつだな。で、そんなに大量に作ってどうするつもりなんだ？」

てつじん先生は信じられないくらいの馬鹿を見たように目を丸くしている。

僕はFクラスのようなバカではないと思いたい。

……勉強のできないバカと馬鹿はまた違うものではあるけどさ。

「みんなに渡すんです。これから一年よろしくお願いしますって。最初は数人だけでいいかなって思ったんですけど、意気込んだ作った結果がこれです。あ、先生方にも渡してください」

最初は小山さんと久保くんに渡す分だけを作ろうと思っていた。だけど、久保くんに渡したとしても、絶対に優子や霧島さんにバれてしまい、久保くんの分が無くなりそうな気がした。だったら、Aクラスの人全員に渡せば問題ない。優子に渡したら秀吉にも回り

そうだし。

小山さんに渡すならCクラスのみんなにも渡そうと考えたのだ。どうせ作るなら、普段お世話になっているてつじん先生にも。ついでに、先生方にも……

と、芋づる式に渡す人が多くなってしまった。

幸いにも、家には一般家庭には相応しくないオーブンが二つもあった。

休日には母が料理教室（お菓子専門）を開いているからだ。

まあ、昨日は帰った後ずっと作っていたから、睡眠時間は三時間も無かったけど。

ジャムを持つてくるのも忘れたけど。

てつじん先生にクッキーが十枚詰まったビニール袋をさらに十五個くらい渡す（押し付ける）。多分、これくらいで先生方全員に余裕で回るだろう。

「そ、そうか。すまん……」

あ、てつじん先生ちょっと引き気味。

「僕は熱中したら止まらないんです。クッキーを作り終えたのも、材料が尽きたからですし」

まあ、これ以上持てないからという理由も少しだっただけ。

「確かに、永瀬は放課後、図書室で本を読んだら最終下校時刻までいるな」

本屋の店番がある日以外は、見回りの先生に教えられて帰るのが

日常という去年だった。

「つまりはそういうことなんです。あ、そろそろ行きますね」

「ああ、転んでクッキーを割るなよ。せっかく作ったのに台無しだからな」

「だいじょ……ありがとうございます」

「ほら、気を付けて歩け」

早速、小石に躓いてこけそうになった。まあ、てっじん先生に支えられてクッキーも僕も無事だった。

慎重に歩いて、僕はまずAクラスに向かうことにした。

そのななっ（後書き）

てつじん先生との会話だけで一話使う私……

そのはちっ（前書き）

なつきくんのさいなん

そのはちっ

「はあ……」

Aクラスの前で深呼吸。昨日は霧島さんのおかげで入ることができたけど、今日は自分で入るのだ。

「緊張しないと言えば全くの嘘、大嘘。でも、昨日よりはマシ。」

教室を外から覗けば、久保くんがいた。運良くまだ彼しか教室にいない。

入るなら今だ。

僕は意を決してAクラスの中に入った。

「久保くん、おはよう」

後ろを向いている彼に挨拶すると、久保くんはゆっくりと優雅に振り返った。

「永瀬くんか、おはよう。Aクラスに何か用があるのかい？」

「うん、正確に言えば、久保くんのついでにAクラスに用があるかな。えと、これ」

布袋からクッキーの入ったビニール袋を大量に取り出す。

「こんなにたくさんどうしたんだい？」

「去年、久保くんには勉強面でかなりお世話になったからそのお礼。久保くんがいなかったら、英語が悲惨なことになっていただろうから」

これは紛れもない事実だ。わからないことを先生に聞くと言っても、先生には先生の仕事が沢山ある。でも、久保くんは人に教えることは自分の勉強にもなるからと、何一つ文句を言うことなく、僕が理解するまでずっと付き合ってくれた。

だから、たま〜に変な視線が来ても気づかないふりをするのが礼儀だろう。

「そうか。それは嬉しいな。また教えて欲しかったらいつでもＡクラスに来なよ」

久保くんの笑顔は嫌みが全くない。今は、変なアレもないからなんとなく安心。

「ありがとう。あと、Ａクラスの人にもクッキーを渡してけると助かる。今年は個人的にＡクラスにお世話になることが多いだろうから」

「わかった。渡しとく、Ｃクラスの永瀬夏樹からのお裾分けって伝えればいいね？」

「うん。よろしくね。じゃあ、僕はＣクラスに行くよ」

久保くんは無事渡し終えると、僕は自分の教室に向かう。

布袋はやつと軽くなった。まあ、軽くなったと言っても、まだクラスのみんなに渡す分があるから重い……

我ながら、よくここまで持って来れたなあって思う。

多分、いつも家（本屋）で何冊もの本を抱えているからだろう。

「さてと、小山さんに渡すのが一番緊張するなあ……」

「な～にが緊張するのよ？」

「えっ！？ うわぁッ！！」

振り返ればヤツがいた。いや、振り返れば小山さんがいらっしやいました。

「……びみょ～にへこむ。あたしは幽霊やら化け物やらなのかな？」

ちよつとムスツとしている小山さん。

瞬時に僕の中の勇氣とかが萎む。

何だろつか、熊に狙われた鮭の心情が理解できたような気がする。別に、蛇に睨まれた蛙でもいいけど。

「あの、ごめん……」

「まあ、いいんだけどねえ。永瀬くんの可愛らしい悲鳴が聞けたからね」

小山さんは全くへこんでなんかない。絶対にだ。

「からかわないでください」

「え？ やだ、無理、却下」

「……何で三回も言うのさ」

「その方が楽しそうだから。さ、永瀬くん弄りは一旦これくらいね。
――あら、早速クッキーを作ってくれたのかにやあ？」

さらりと小山さんは言った。うん、小山さんに色々な意味で勝てる気がしない。

話しながら、Ｃクラスの中に入り、僕はクッキー以外の荷物を置く。

「え、何でクッキー作ってたってわかったの？」

「そりゃ、そのでっかい袋とあまーい香りでわかるよ。リクエスト通りバタークッキーね。……ん？ 違う香りもちよっと混ぜてる？」

犬ですか小山さん。や、そんなことを言ったら、僕の命が……。うん、言えない。

「生地にジャムを混ぜたのも作ったから、多分その香りだと思うよ」

ちなみに、リンゴ、イチゴ、モモの三種類がある。昨日味見をしたら、香りはちゃんとあるけど、ジャムの味はうつすらだった。

「へー、すごいわねえ。じゃあ、もらっていいの？」

「もちろん、小山さんに作ってきたようなものだから」

「嬉しいことを言ってくれる子だねえ。あいつからそんな聞いたことないよ」

ビニール袋からバタークッキーを一枚取り、小山さんに渡そうとすると、

「あれえ？　こゝいう時は普通、直接口に入れてくれるもんじゃないのかなあ？」

――なんてイイ笑顔。

「……………え？」

「いや、だから、あゝん？」

彼女は僕に何をさせようと言っのか？

ちよつと待て、考えろ、考えろ。

ここは何処だ？　Cクラス。

誰がいる？　僕、小山さん、その他クラスメイト数人。

で、状況は？　クッキーを差し出す僕。口を小さく開けて待つ小

山さん。そして熱い目で僕たちを見る見物客（クラスメイトの女子）。

――これはヒドい。

「口を開けて待ってるのもちよつと辛いんだけどなー」

「……おに、あくま、きちく」

「可愛くてか弱い乙女に鬼畜はないと思うよー」

……あきらめよう。もう、あきらめよう。

僕は無言で小山さんの小さな口に、バタークッキーを差し込むようにして入れた。

小山さんはゆっくりと味わって食べてくれていた。

「うん。美味しい」

「……それは良かったです」

かなり恥ずかしかったけど、美味しいと言う言葉に嬉しくなる。その向日葵が咲くような笑顔を見ただけで作った甲斐があったと思えた。

次の言葉がなかったなら。

「あ、そうだ」

……え？

「ふっふっ、イイコト考えちゃったあ」

小山さんは何やら思い浮かんでしまったようだ。目がキラッキラに輝いてるもん。

嫌な予感しかない。しかも、絶対に的中する。

「みんな、永瀬くんからあゝんしてもらわない？」

「……………」

僕は考えることを放棄した。

そのはちっ（後書き）

原作の小山さんはここにはいません。

……ヒロインの優子より目立ってます。

そのきゅう（前書き）

かいわぱーと、ネタ入り。

そのきゅっ

「そんなにぐったりしなくてもいいじゃないの」

「……………」

小山さんの悪魔なような一言の結果、僕はクラスの女子ほとんどに『あーん』をしてしまった。途中から、ノリの良い男子が何人か混ざっていたが、もう、気にならなかった。つまりは、諦めたのだ。

僕は机にぐったりと、小山さんは僕の前に座って（前の席を借りて）天真爛漫な笑顔を浮かべていた。

「ほーら、そんなに拗ねない。可愛い顔にシワができてるよ」

あなたのせいですよ。と、僕は視線で喋る。

「まあ、そうなんだけどさあ。おねいさんだってただ弄りたいからやったわけじゃないのよ」

それもわかってます。だからこそ、落ち込むんじゃないですか。

「ふむふむ。そだねえ。ゆっくり馴染むのも一つの手だね。でもさ、ああやった方が手っ取り早くない？」

それはそうですね。

「でしょー。それに、頑張って作ったクッキーもみんなに美味しいって誉めてもらったじゃないの。私もあれは本当に美味しいって思ったしね。それは紛れもなく『永瀬夏樹』個人の頑張りでしょ？」

だから、自信を持ちなさいな、と小山さんは言った。

ありがとう。

あれ、でもさ『あーん』は必要なかったんじゃないかな？

普通にみんなに配って食べてもらったらよかったんじゃない？

僕は感謝と疑問の視線を彼女に送った。

「…… やっちまったもんは仕方ないね。うん、そこは諦めて。こっちにも打算があったのよ」

……？

「代表として、誰がどのような性格か簡単に把握したかったのよ。ノリが良いとか悪いとか、可愛いものの好きとか嫌いとか、お菓子好きとか嫌いだったか」

理解できました。でも、最初の二つ以外理由になっていませんよね？

「や、それは違うのよ。個人の趣味嗜好を知ってたらクラスをまとめるのにも色々と役立つのよ。ほら、Fクラスが試召戦争始めちゃったでしょ、だから尚更にね。納得できた？」

そういうことですか、納得できました。

「そりゃ良かった良かった。さ、そろそろホームルームだから席に

戻るわね」

そう言っ僕が何か言う前に、小山さんは席に戻ってしまった。

……あれ？ 何か違和感がある。

ちよつと待て『僕が何か言う前』？

いや、僕はさっきまで、小山さんと会話していたのか？

混乱する、めだばに、こんふゆが同時にかかったような気分だ。
考えろ、考えろ、マクガイバー！

さっきまでの状況を一度整理……

僕は机にぐったり、小山さんは僕の前に座っていた。小山さんが話しかけてきて、僕は『視線』を送った。すると、それを理解した小山さんは普通に話した。僕はまた『視線』を送った。すると、それを理解した小山さんはまた普通に話した。

- - 以下『会話』が終了するまで。

そう、僕は、一言も小山さんに話しかけてない。そのくせに、小山さんは僕が何を考えていたかを正確に把握し、話していた。

彼女が僕の言いたいことを理解していたから、僕自身が話していないことに何も違和感を持っていなかったのだ。

端から見れば、片方が勝手に喋り、もう片方は視線だけを送る。

それで『会話』が成立している。なんて不自然な光景なんだろうか

……

僕は小山さんを見たが、彼女は何もかもわかったような顔で、小さく僕に微笑むだけだった。

……小山さんってもしかして、えすぱー？

僕は結構本気でそんなことを考えてしまっていた。

そのきゆうつ（後書き）

こやまさん は えすぱー たいぷ かも

気が向いたらアンケートなどお願いしますね。もちろん、普通の感想・批評・批判もお待ちしております。

そのじゆつ (前書き)

ほのぼのぱーと、こねでこゆつりょつのおこらせ

そのじゅっ

今日はFクラスがBクラスに宣戦布告をしたが、試召戦争自体は明日やることになったらしい。

何故、Cクラスを飛ばしたかはあまり興味がない。面倒なのは嫌いだし、秀吉とは戦いたくもなかったりする。

帰りのホームルームで小山さんの話しが始まった。

「さて、昨日はFクラスがDクラスに勝っちゃったわね。それでさあ、根本 - Bクラス代表がね、協力しなかった誘ってきたのよ。独断で返事するのはアレだから保留にしてるんだけど、みんなどうする？」

小山さんは溜め息混じりの声だった。彼女はかったるい、面倒だな、根本うざい、と思っっているのだろうか。

根本くんは小山さんの彼氏らしいけど。彼女曰わく、仲は冷め切っている（小山さんが愛想を尽かした）らしい。

僕は別れるきっかけでも探しているのかなあと勝手な憶測していた。

「一応二パターンあるのよねえ。協力してFクラスを倒すか、協力しないで傍観するか。個人的には面倒だし、協力するメリットもないって思ってるの。あ、協力するふりして逆にBクラスを潰すって手もあるか、三パターンね」

…… Fクラスは倒すなのに、Bクラスは潰すという。小山さんは

何か恨みでもあるのだろうか。ただ、根本くんが嫌い過ぎるだけなのだろうか。知りたくなってしまったけど、聞くのはものすごく怖い。

「さ、てきとーに手え挙げてね。まず、Bクラスと協力する方がいいと思うひとー？」

- 誰も手を挙げない。

「はい、じゃあ、傍観する方がいいと思うひとー？」

僕は手を上げる。周りを見ても結構な人数が手を挙げていた。

「はい、次、Bクラスをぶつつ潰したいってひとー？」

三人程手を挙げた。それでもクラス全員が手を挙げたわけじゃなかった。

……小山さんの声に力が入っていたけど、うん、もう気にしない。

「んじゃ、残りの人は私に任すって考えていいよねえ？」

それに手を挙げていない人たちは頷いた。

「わかりました。じゃあ、傍観するということで。明日、Bクラス代表に伝えます。以上です」

そして、ホームルームは終わり、解散した。

僕はすぐに帰ろうと、教科書などをバックに詰め込んでいた。

「えーと、永瀬くん」

「う……ん？」

僕は横尾さんから声をかけられた。横尾さんと僕が話すのは今日の朝――クッキー事件（僕命名）が初めてだった。

僕は彼女に、その……あれをした瞬間を思い出してしまい、頬が熱くなる。

「朝のお礼をもう一度したいって思って……。クッキーありがとう、美味しかったよ」

若干恥ずかしそうなのは、彼女もあれを思い出しているからなのだろう。

まあ、それはともかく、もう一度お礼を言われることは純粋に嬉しかった。

「それは良かったです。喜んでもらえたなら僕も作った甲斐がありました」

「それでね、ちょっと永瀬くんに教えて欲しいことがあるの」

「……？」

僕は首を傾げる。

「あのクッキーのレシピ、教えてくれませんか？」

「えと、クッキーだから別にどのレシピ本とか、インターネットで見るやつと同じだと思っけど？」

僕が作ったクッキーといっても、特に変な作り方をしたわけじゃない。何冊かのレシピ本に書いてある分量の平均値で作っただけである。

「あ、質問の仕方が悪かったです。クッキーに入っていたり、薄く塗られていたジャムはどこで買いましたか？」

「ああ、あれは買ったんじゃないくて、僕が作ったんだ。作り方ならすぐにメモして渡すね」

「えっいいの？　ありがとう」

ルーズリーフを一枚、バックから取り出し、ボールペンでレシピを書いていく。ジャムは何回も作っているから、材料や分量の比率、作り方のコツなどを全て覚えている。

「はい、多分これで大丈夫。何かあったら気軽に聞いてね」

「うんっ。本当にありがとう」

眩しいくらいに綺麗な笑顔で横尾さんは去っていった。

「- やっぱり間違っていたじゃないの。と、小山さんの声が何処からか聞こえたような気がして、つい頷いてしまった。

もちろん、教室の中に小山さんはいなかった。

そのじゅう (後書き)

アンケートは明日の23:59までですので、
気が向いたら答えて
みてくださいね。

そのじゅうちっ (視点変更) (前書き)

時間が一気に飛びます。

そして、これから数話はコメディが一切ありません。

そのじゅうちっ (視点変更)

大丈夫なのじゃろうか……。

わしらはCクラスを挑発するために準備をしておった。

正直気が進まぬ。騙すことが心苦しいのもあるが、何よりもCクラスには友人が一人おるせいじゃ。

永瀬夏樹、そやつがおったら、ワシの演技がバレてしまふ危険性がある。

ほんわりとした奴で、気弱な夏樹はワシが弄ることのできる数少ない人物なのじゃ。

夏樹は姉上に惚れておる。それはもう夏樹本人が否定せぬほどに姉上にだけにはバレないようにと振る舞っているせいか、本人にはバレておらん。

じゃが、夏樹に関わる周囲の人間にはほとんどに知られておる。

ワシと姉上、双方との親交が深い夏樹は、ワシらを見分けることができってしまうのじゃ。まあ、その理由として、やつが姉上のことが好きであることも関係しているとは予想ができるのじゃが。

そもそも、何故CクラスにAクラスを攻めさせるのかがワシにはよく理解がでんかった。

雄二がCクラスに不可侵協定を結ばうとした時に、Bクラス代表の根本が出てきたが、Cクラス代表の小山は「Fクラスとは協定は結ばない、だからといってBクラスと協力するつもりは全くない」

とはつきりと言いおつたのに。

その時の根本の顔は見物じゃった。絶対的に自分に従うと思っておつた相手に、裏切られたような顔をしておつたからじゃ。

だから、別に必要はないと思つたのじゃ。だが、それを進言したら「念には念を入れる。アレは演技かもしれない」と即答され、決まってしまったのじゃ。

夏樹という知り合いがおることも伝えたが「わかった、手を打とう」とさらに即答され、夏樹を呼ぶ校内放送を仕掛け、夏樹がＣクラスから出るのを確認しておつた。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

Ｃクラスを挑発する役目の木下優子 - 姉上を演じるのじゃから、一緒にＦクラスの間人がおつてはならぬ。

「気が進まんのう……」

騙す相手がよりによって、ワシの大切な友人が所属するクラスなのじゃ。気が進まぬのは当たり前じゃ。

「そこを何とか頼む」

やりたくはない。

「むう……。仕方ないのう……」

じゃが、気が進まぬからと言って、やらぬわけにはいかぬ。ワシは今Ｆクラスに所属しているのじゃ。「代表」の命令には従わなければならぬ。しかも、ワシの演技一つでＦクラスの命運が決まっ

てしまうのじゃ。

もし、演技が失敗し、ワシが姉上を演じたことが知られば、Cクラスは恐らくBクラスと協力することになるのじゃ。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくる。お前ならできるはずだ」

今すぐ、ここから逃げたい。

「はあ……。あまり期待せんでくれよ。それにこれは命令だからやるのじゃ。ワシの意志ではないし、この結果に何が起ころうともワシの責任にしないで欲しいのじゃ」

戦争で兵士が敵兵を撃つ理由の一番は「殺さないと殺される」からじゃない「命令されたからやる」なのじゃ。

ただ、自分の責任を軽くしたいという思いじゃが、今はその兵士たちの気持ちが嫌というほど理解ができたのじゃ。

正直、理解しなくなかったものなのに……

「……ああ、わかった。約束しよう」

そう約束したからこそ、ワシはやる。

……さあ、やりたくもない道化を、楽しんでやる道化に演技せねば……

「静かになさい、この薄汚い豚どもッ！」

吐きたくもない言葉を、嬉々としてやらねばならぬ。

「何よ……。アンタ、Aクラスの木下優子でしょ？」

「話しかけないで！ 豚臭いわッ！」

どうか、どうか話しかけないでくれ、今のワシは、友人の想い人の姿で、友人のいるクラスに喧嘩を売っているのじゃ。

「……それ、本気で言っているのかしら？」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんか豚小屋で充分だわッ！」

言葉を一つ吐き出す度に、罪悪感の刃がワシを突き刺す。少しでも気を抜いたら、その瞬間に、ワシは潰されてしまう。

「そう……。あんたは、ここが、Cクラス、アレのいるCクラスだと知って、そんなことを言っているのよね？」

やめてくれ、やめてくれ。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」

嫌なのに、口からは相手を傷つける言葉がするすると出る。
それが本心かのように……

「わかった。あんたはちゃんと理解しているのね」

ワシは一体、どんな顔をしておるのじゃ？　ちゃんと、道化を演じておるのか？　それとも……

「覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるからッ！！」

それだけ言つてワシはすぐCクラスから出ようとする。もう、居たくない。

後ろから、小山の声が聞こえた。

「私は、Aクラスを、ぶッ潰したいんだけど、みんなは、どう思う？　ねえ、ここまで、馬鹿にされてるんだけど、どう思う？」

『ぶッ潰したいッ！！』

同時に放たれる怒りの雄叫び。

「だったら……ぶッッ潰すッ！！」

『おおおおおオオッ！！』

学園が震えると思えるほど、大きな、怒りの声が、聞こえてしまったのじゃ。

「これで、これで良かったのかのう……」

呟きは自問自答、答えなど出なかった。

「素晴らしい仕事だな。これで、Cクラスの危機は去ったな。ご苦労だった」

「ああ、そうじゃの……」

「どうしたんだい秀吉？」

「何でもない、何でもないのじゃ……」

教室に帰り、トイレに行つてくると告げるまで、ワシは演技を続けねばならなかった。

何も傷ついてなどいないなどと、愚かで、浅ましい道化を、演技をしなければならなかった。

そのじゅうちっ（視点変更）（後書き）

夏樹と関わった場合の秀吉の内心を想像して書きました。
秀吉の口調に違和感はなかったでしょうか？

そのじゅうにっ(前書き)

展開が早いです。

そのじゅうにっ

「明日、Aクラスに試召戦争を仕掛けるわ。永瀬くんは嫌だろうけど、これは決定事項」

職員室に呼び出されたが、結局それは間違いだった。てつじん先生と雑談することはできたから良かったけど。

そして――教室に戻った瞬間にこの状況だった。

「……理由は何でしょうか？」

「言わない、いや、言えないと言う方が正しいかな」

納得のできない返事だったが、クラス中が殺気立っているのはわかった。だから、余程の理由があるのだろう。それが何かなんて僕にはわからないけど。

「まあ、正直Aクラスに挑むなんて馬鹿げてるわ。でもね、わかっていてもやらなきゃいけないことってあるでしょう。それが今なだけ」

静かに告げた小山さんの目には、強い気持ちが見え隠れもせず表れていた。

「さ、永瀬くんは国語なら主戦力だからね。知り合いがいるからって加減なんかないですよ」

「……わかってるよ。僕は今、Cクラスの一人だし、それに、ここが好きになれそうなんだ」

初めて、クラスにいる人たちと話せた。今までのクラスで、必要事項以外で話したことがあるのはほんの数人だったから。

Cクラスのみんなとは、必要事項以外で話すことができた。自分がちゃんとクラスの中にいるんだなあって実感が沸いた。

「ならばよし」

そのきっかけを作ってくれたのは、他の誰でもなく、小山さんだから、僕は彼女に感謝している。

新しい学年になって、まだ数日しか過ぎていないのに、小山さんとは長年の付き合いがあるかのように感じられた。

もちろん、それは、僕が勝手に思っていること。

彼女は代表だから仕方なくやっているのかもしれない。心の中でどう思っているかはなんて僕にはわからないから。

でも……それでも良いんだ。

「さてと、全員揃ったことだし……」

そう言っただけで彼女は教壇の立つ。

誰もが彼女の言葉を待つ。

「さて、作戦を伝えるわ……まあ、あつてないようなものだけど」

そう言っただけで彼女は白いチョークを一本取り、黒板に書き始めた。

『これから、口で言うことと書くことは違います。黒板に書いてあることを覚えてください。Aクラスには口で言うことをわざと聞いてもらいます』

彼女らしい、綺麗な筆跡だった。女性に多い丸まった文字でも、雑に書かれた文字でもない、丁寧な文字だった。

そして、彼女は大きく息を吸う。

「クラスを四つにわけ、一つはそのまま攻めなさい。一つは旧校舎から回り、もう二つは最初の班がバテたら交代。私は回る班の交代にいるわッ!!」

隣のAクラスにまで届くように大きな声で言っていた。しかも、ヒステリックな演技をしているからか、とても真実味がある。

『クラスを二つにわけ、一つはそのまま攻め、もう一つは旧校舎から回りなさい。私や主戦力は前者のグループ後方に加わります。旧校舎側には理系の、新校舎側は文系の教師を連れてってください』

……なぜ？

「旧校舎から回る班には主戦力を投じるわッ!!」

『旧校舎から回る班には後ろから主戦力がくると思わせるために人数の大半を送ります。さらに、文系と理系で相手の戦力を分断。Aクラスとの戦力差は大きいから、短期決戦を行います』

納得ができた。CクラスとAクラスとの差は言うまでもないくらい大きい。だから、長期戦になると全体的に点が高いAクラスには

勝てなくなってしまう。

点数が圧倒的に低いCクラスが勝つためには、後から主戦力がくると油断させておいて、すぐに決着をつけるしかない。

「勉強ばっかのAクラスには体力がない！ 全ての教科を使い長期戦に持ち込んで粘り強く勝つわよッ！！」

『理系は理系全てを、文系は英語と国語（現代文・古典）だけでいきます』

「さあッ！ 私たちを馬鹿にしたAクラスをぶっ潰すッ！！」

――何か引つかかりを覚えたが、口に出すことができなかった。

そのじゅうさんっ

「井阪弘介・在河裕実・支葉遼平の三名戦死ッ！ 旧校舎側理系組はほぼ全滅！！」

野次馬くん（仮名）から伝わる相次ぐ戦死報告。既に、Cクラスの戦力は半分以下になっていた。

しかし、彼女は全く慌てていない。

「そう、わかった。Aクラスの戦力はちゃんとわかれてる？ あと、代表と木下優子はどこ？」

小山さんは冷静に野次馬くん（仮名）に聞いていた。

「計画通り、旧校舎側に理系が、こちら側に文系が集まっています。人数は理系寄りで、霧島翔子は文系寄りに、木下優子は理系寄り位置していますッ！」

それを聞いて小山さんは薄く笑う。

「ふふ、ありがとう。……そろそろ攻めるわ。あなたたち早く攻めたくて興奮してるわよねえ」

彼女は後ろにいる文系数人の精鋭に甘い声で激を飛ばす。彼（彼女）たちは、本当にAクラスを攻めたくてうずうずしていた。未だに、僕は、何故Aクラスと戦っているのかを知らない。

「向井先生、これからお願いします」

「わかりました」

ちよつと前に野次馬くん（仮名）に呼んでもらった国語の先生だ。採点は早くはないが遅くもない、しかし記述解答ならば部分的などをしっかりと与えてくれる先生だ。

「さて、正直に言うと永瀬くん頼りなのよねえ。もちろん、私たちも本気だけど、国語で永瀬くんに勝てるのはAクラスでもあんまりいないと思うから。期待してるわ。さあッ、行くわよ!!」

- - 僕たちは教室を出てAクラスに突撃した。

初めての試召戦争。

初めて優子と真っ向勝負ができるのだと思うと、わくわくしてしまっていた。

そして、Cクラスに自分が必要とされているのだとわかったら、ますますやる気が出てしまう。

「Aクラスに現代文で勝負を挑みますッ!!」

「なッ!？」

僕たちの突然の登場にAクラスは驚いていた。しかし、ただ、突然ならこんなには驚くことはない。何故なら、代表 - - 小山さんがいるからだ。

普通ならば、代表とは最後列にいるものだ。しかし、それじゃあ、駄目だ。

代表自身が参加することによって、指示はすぐに通るし、全員の

戦意も上昇する。

「俺もだッ!!」

「永瀬夏樹も参加しますッ!!」

『召喚ッ!!』

野次馬（仮名）に続き、すかさず僕も小山さんの勝負に割り込んだ。

- - 点数が表示される。

『現代文』

Aクラス

守成桐真 椎帝許陽 青上日明

3 2 3 3 4 7 3 5 2

V S

Cクラス

小山友香 野次馬くん（仮名）

2 8 5 2 4 1

永瀬夏樹

4 9 3

「潰しましょう」

小山さんの一言。

「うん」

僕も一言だけ返し、相手の召喚獣を文字通り潰す。圧殺。

「――あ、え？」

Aクラスの三人はその言葉を言っただけで、デフォルメされた彼らの召喚獣は、一方的に蹂躪され既に消失していた。

「あれ、俺いなくて問題ないんじゃないか……？」

野次馬くん（仮名）が小さく呟いたが、小山さんは黙殺し、僕は心の中で謝った。

――ごめん野次馬くん（仮名）、君の役目台無しだね。

初めての対戦は呆気なく勝つことができた。もちろん、これが国語じゃなかったら逆の結果になっていることに違いない。

「さ、このまま、増援が来ないうちにAクラスを潰すわ」

――ふう、小さく溜め息。溜め息だからと言ってマイナスなわけではない。僕にとっての溜め息は深呼吸と同じようなものであり、落ち着くためだ。

「待ちなさい」

一気に倒そうと思った刹那、聞き慣れた声が返ってきた。

「……木下優子」

Aクラスを何人も連れた、優子だった。

「上手く分断したり、わざとAクラスに作戦を聞かせて惑わせるのは正解だったわね。でも、戦力差というものは考えなかったのかしら」

優子はごく自然に、まるで子供に話すかのようにだった。

「そんなもんわかってるわよ。流石Aクラスね、戻ってくるのが早いか」

目の前には、優子、霧島さん、久保くん、その他Aクラスが10人くらいと、とても僕たちで勝てる人数じゃなかった。

- - つまり、僕たちの負けだ。

「まあ、頑張ったことはわかる。何でAクラスを攻めようと思ったのかしら？」

優子は心底理解ができていない表情をしていた。

その一言で、彼女の何かがぶつりと切れた気がした。

「あはは、そう。あんたが喧嘩売ってきたのにそんなコト言っの。はあ、Aクラス様はゴミにした発言なんか一日も経たずに忘れちゃうんだ」

「……え？」

優子は小山さんが何を言っているのかわからないのか、目を丸くしている。

永瀬くん、ごめん。と、小山さんは僕にだけ聞こえるように呟いて話し始めた。

「静かになさい、この薄汚い豚ども。私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの。貴女達なんか豚小屋で充分だわ」

……？

「……何を言ってるの？」

生き残っているＣクラスの全員が優子を親の仇を見つけた復讐者のように睨む。

「あんたが昨日Ｃクラスに来て言ったことよ。真逆忘れた訳じゃないよねえ」

……え？

優子が、そんな、ことを？

笑顔な小山さんだったが、その逆、全く笑っていなかった。

「ごめん、本当にわかんないんだけど」

「嘔吐くんじゃない。ねえ、みんな、聞いてたでしょう？　木下優子が私たちをゴミを見るような目で、馬鹿にするのを」

「……………」

沈黙が答えだった。

何で、優子が？

信じられない気持ちがあったけど、何人もの人がそれを見ていたらしい。

「木下さん、それは本当かい？」

久保くんが静かに優子に問うた。

「ち、違うわよ。何であたしがCクラスを馬鹿にしなきゃならないのよッ！！」

優子も優子で混乱しているのか必死だった。
混乱しているのは優子だけでなく、僕も、小山さんも、みんなもだった。

「……………ちょっと、待って」

収集がつかない時に、静かだけどよく通る澄んだ声、霧島さんだ。

「何よ」

彼女の言葉に、小山さんは聞き返す。

「……………まず、AクラスはCクラスに攻め込む利点がない。次に、優子が、仲の良い人がいる、Cクラスを馬鹿にするとは思えない。最後に、永瀬くんは、私たちにクッキーをくれた、とてもおいしかった。よって、AクラスがCクラスに試召戦争を仕掛ける理由の一つ

もない」

……最後ので空気が緩んだのは何でだろうね。

「そうだね、みんな、昨日は永瀬くんからクッキーの差し入れあったけど、どうだったかい？」

次は久保くんがAクラスの人に問うた。

「美味かったー」

「だよな」

「……Cクラスは良い人がいる」

「また食べたーい」

「今度は直接食べさせてもらいたーい」

「何それ？」

「えー昨日永瀬くんが、みんなに『あ〜ん』をしているのを廊下から覗いちやっただー」

「なんだとっ！ 僕だって一度もしてもらったことないのにッ！！」

「何で久保くんがに反応するのよッ！？」

「いーなー」

「……あたしも」

「でも、美味しかったよなあ」

「うん、美味しかったねー」

――なにこれこわい。
収集がつかなかったのを霧島さんがまとめようとしたのに、久保くんの一言でまた混乱。

「じゃあ、私たちが見たのは何なのよッ！？ 木下優子じゃなかったら誰なの！ そんなに顔も声も同じ人なんているの！？」

小山さんが遂に叫んでしまったが、それが、全ての答えになった。

「……あ、でも、あれ？」

「……そっか、あのバカ」

僕と優子は同時にわかってしまった。

それと同時に、嫌な感情も沸いてきてしまう。

「小山さん、答えがわかったわ。犯人はあたしの愚弟、Fクラスの木下秀吉ね」

「……納得。Aクラスの戦力を弱めようと、CクラスがFクラスを襲えないようにしたんだと思う。雄二ならそれくらいやる」

- - 絶句。

僕たちCクラスは何も言うことができなかった。

そのまま何分も、何時間も過ぎたように思えた。実際にたった数秒、数十秒だったのかもしれない。

「……そう、そうなの。イイじゃない、さいッこっじゃないの」

ふふふ、あはは。小山さんは妖しく笑う。

「ねえ、この試召戦争を引き分けて終わらせてくれないかしら？」

「……いいけど、何で？」

「簡単よ。負けたらFクラスに宣戦布告できないから」

「……わかった。高橋先生、引き分けて終わらせて」

「わかりました」

そうして、僕たち最初の試召戦争は終わった。直ぐに、もう一度始まることはわかったのだけど。

ただ、秀吉が、あんな言葉を、たとえ勝つためだとしても、言ったことが、僕には理解し難かった。

教室に戻ってから、補修室行きになった人たちも帰ってきた。試召戦争どんな結末になったかを小山さんがみんなに説明した。そして、また彼女は教壇に立つ。

昨日も見た姿なのに、昨日より、何倍も彼女が大きく見えてしま
う。

みんなが彼女の次の言葉を待つ。

「正直ね、Aクラスに馬鹿にされるのは嫌だったけど、心のどこかで仕方がないって思ってた。私たちなんかより、余程努力をしたんだから。頭のイイ奴が下に命令するのは当たり前なのよ。そして、下の人間は上から言われても言い返す言葉はないの」

小山さんの話しは厳かに始まった。

「でもね、私たちはFクラスに、努力することさえも放棄した、向

上心のないFクラスに馬鹿にされてんのよ?」

そこで、小山さんはCクラスの一人に指を差した。

「ねえ、あんたがいるクラスは何?」

大きくはない、しかし厳しい声で。

「……Cクラスだ」

指を差された支葉くんが固い声で答えた。

「そう、あたしたちはCクラス。AクラスやBクラスに劣っているのが事実よ」

彼女は息を大きく吸った。

「……だけどッ! 勉強した結果あたしたちはここにいるんでしょ!? それとも、あんたは何もせずここにいるのッ!?」

それは悲痛な、体の底から出てきたような声だった。

そして、小山さんはまた指を差した。

「……違う、違う」

指された在河さんは震える声でそう答える。

僕だって同じだった。勉強せずにCクラスになったわけじゃない。去年一年勉強してここにいるんだ。

「だったら、墮落したFクラスなんか舐められたままで我慢でき

るのかッ！？　できないでしょ！！」

誰もが黙る。しかし、そこには強い怒りがあつた。
僕の中でも、強い感情が心の、いや、体中を支配していた。

「小石みてえにちっぽけなプライドが許さないでしょうがッ！！」

小山さんがそこまで言うと、また静寂が訪れる。

彼女の顔は赤くなっていた、目には薄く涙が溜まっていた。

「これからやることは……Fクラスを潰すことよ。そのために今度、死ぬ気でテストを受けなさい。それまでは死に物狂いで勉強しなさい」

誰も返事をしなかった。

いや、返事をする必要がなかった。

答えはもう、わかりきっていたことなのだから……

そのじゅうさんっ（後書き）

真面目だけのはずが、ネタを含ませた結果がこれです。

Aクラス戦は最初からあっさりと終わらせる予定でした。

ただ一言だけ書かせてください。

小山さんはかわいい。

そのじゅうよんつ（視点変更）（前書き）

秀吉と優子がメインです。

そのじゅうよんつ（視点変更）

「先生、ちよつと失礼します」

「わかりました」

「ちよ、姉上、何を……」

ワシは姉上に腕を引かれて、廊下に連れて行かれた。高橋先生は事前に姉上から何か言われていたのか知らんが、直ぐに了承した。

「ねえ、秀吉。小山友香って知ってるかしら？」

「……知らんのう」

ワシらはBクラスに勝ち、Bクラスを利用することによって、Aクラスとの5対5の一騎打ちをすることに成功していた。

初戦、ワシは姉上と対決することになった。姉上が相手では正直、万に一つも勝ち目がないことはわかっておる。

じゃが、ワシが駄目でも、明久や姫路、ムッツリーニ、そして代表の坂本という仲間がおるのじゃ。

全員が団結すれば絶対に勝つ、学力だけが全てじゃないと、ワシが勉強のできる姉上に劣る存在じゃないと証明したい。

「へー。知らないの。あんたがあたしの振りしてCクラスに行ったでしょ？ そのCクラスの代表よ」

「……あ」

が、その一言にワシの背筋はいとも簡単に凍ってしまった。姉上に勝てなくとも、一矢報いてやろう、そんな気が削がれてしまったのじゃ。

理由は単純だった。ただ、ワシが行った行為を振り返ればいいだけ。

「ほら、この一騎打ちを見物しに、ほとんどのクラスがいるじゃない。で、気づかない？」

教室の中を見渡すが、他クラスの人がまばらにおること以外は特に変わってはおらんかった。

「わからない？ あそこにE、そこはD、Fクの後ろにB。で、Aの後ろにCクラスの小山さんよ。これで何か気づくかな？」

Aクラスの教室は広い。それはもう、100人以上入ることが可能なほど。

姉上の言った通り、もう一度見渡すと、確かに他のクラスの人物がおった。

どのクラスも大体10人くらいはいた。

じゃが、Cだけは代表の小山しかおらんかった。

ワシと姉上が所属しているクラスが戦うから当然いると思っておったのに、夏樹がおらんかった。

「気づいたようね。そう、Cクラスだけは彼女しか見に来てないの

よ。理由は簡単よねえ。本当にAクラスが馬鹿にしたなら、まだマシだったでしょうに、まさかFクラスがCクラスを馬鹿にするなんてね。で、何か言い訳はある？」

「……ッ！」

口がパクパクと動くだけで、声は全く出なかった。そう、Aクラスに挑むそのためにだけに、ワシは、ワシらは、Cクラスを騙してAクラスを襲わせた。

勿論、騙したことそれが悪いのではなかった。戦争ならば、騙し合うのも当たり前前の戦略の一つじゃったから。

しかし、ワシがやったことは何じゃ？

実は、ワシらが散々陰湿だと言っていた根本よりも酷いことをしたのではないじゃろうか。

「代表」の指示だったが、Cクラスの使用を否定し、罵倒する。それは、ワシらがされることを一番嫌っている行為そのものではないかろうか。

姫路のためにやっていることもあるが、学力が全てじゃないことを証明するのを一番として、この試召戦争を行っているのじゃ。

そんなことを考えておるくせに、Cクラスに対してやっていることはただの罵倒。Aクラスの姉上と偽って、Cクラスの学力や努力を否定しただけ。

考えたくはなかったが、普段の様子を見るに、Fクラスはただの怠け者ばかりじゃ。

良く言えば、バカ騒ぎが大好きな気の良い仲間たち。

じゃが、それだけだった。真面目にしている者などほとんどいなかったのじゃ。

明久だって観察者処分という、学園一不名誉の称号を得ている。

そんな「ヤツら」に、Cクラスは馬鹿にされたのじゃ。上からではなく、下から。見下すように。

後悔の海に、沈む。底がわからない、深海に。

「ああ、それと。こんなこと聞いたことあるかなあー」

姉上は楽しそうな口調の割に、顔は全く笑っていない。むしろ、その逆。

「普段穏やかな人ほど、怒ると恐いって」

沈んだ海からは浮き上がることはできそうにはなかった。

「さて、言いたいこと言ったから戻りましょ。みんなを待たせるわけにはいかないしね」

姉上に腕を痣が残りそうなほど強く握られ、引きずられるようにして教室の中に入っていった。

「それでは、始めてください」

「……待ってくれ」

「何か？」

「……ワシは、木下秀吉は、この勝負を……棄権する」

「ひつ秀吉ッ！？ どうしたんだい？ 木下さんに何か嫌なことを言われたのかい！？」

明久の声が酷く遠くから聞こえた。

「本当にそれでいいのですか？」

「……ああ、それで、いいのじゃ」

高橋先生の確認に、小さな声でワシは肯定した。

そして、壁一面の大きなディスプレイに、ワシの負けが表示された。

そのじゅうよんつ（視点変更）（後書き）

私はFクラスのアンチを目的として書いているつもりは一切ありません。

ただ、Fクラスの行為をFクラスの視点ではなく（Fクラスに感情移入せず）、俯瞰的に見たらこんな考えになっただけです。

また、秀吉は数少ない常識人なのでこのような役になりました。

そのじゅうじつ (視点変更) (前書き)

相変わらず暗いぱーと

そのじゅっ (視点変更)

「木下どうしたんだ？」

坂本が不思議な顔をしてワシを見ておった。

ワシは負けを宣告された後、重い足取りで自らのクラスに戻った。

クラスからワシに珍しく厳しい視線が突き刺さる。当たり前じゃ。姉上と勝負して負けたならまだしも、ワシは自ら棄権したのじゃから。

「……ワシらが、この勝負でAクラスに勝ったとして、それでいいのじゃろうか？」

「何を言い出すんだ？ Aクラスに勝って、教室の設備を向上し、学力だけじゃないって周りに思い知らせるんだろ。姫路のためにだつてなる」

「それはわかっておる。じゃが、ワシらの行為振り返ってみたらの、到底学力だけじゃないと証明することはできないと思うのじゃ。いや、ある意味証明できるかもしれぬ。が、それは、規則を破り狡猾くした者が勝ちで、真面目な人が損をすることを意味する。そんなことを証明しても、ワシは全く嬉しくないッ」

真面目な人を否定することになる。それはつまり、努力の否定。彼らがAクラスにおけるのは勉強を頑張った結果じゃ。中には天才も

おるじやろうが、そんなのは一握りで、大多数はまともに勉強した人達。

ワシはFクラスじゃが、演劇に関しては誰よりも力を尽くしておる自信がある。

誰かの頑張りを否定することの延長には、自分の頑張り――演劇を否定することに繋がってしまう。

Aクラスに勝つのが問題なのではない。勝つために戦略を使うのは当然じゃ。だが、他者を否定することを「戦略」なんてワシは言いたくはない。

「……ああ、Cクラスのことを言っているのか。わかってる、アレは俺が責任を持つと約束した。方法としては悪い。が、今の俺たちが安全にAクラスに挑むにはああするしかなかった」

苦虫の噛んだような顔をした坂本は、ワシの言うことを全く否定することがなかった。

全部理解した上で、何が一番効率的かを考えたからこそ、今の状況があるのじゃ。それは確かな事実だった。

一騎打ちはいつの間にかに進んでいて、姫路が出ておった。

姫路がFクラスが好きだから頑張れると言っていたが、それをCクラスの代表はどのような気持ちで聞いていたのじやろうか……

「……わかっておる。わかっておるのじゃ。それでも、やり切れぬ。それに今後、Cクラスから絶対に試召戦争を仕掛けられるじやろう。ワシは、それが一番怖い」

どうして仲の良い友人と戦わなければならないのじゃ。しかも、夏樹はきつと、否、絶対にワシを敵視している。姉上が最後に言ったのはそういう意味じゃから。

胸の奥に溜まる、汚泥のように暗く汚いモノ。それが吐き出される時はきつと……

「どういうことだ？　ＣクラスはＡクラスに負けて三ヶ月間は仕掛けられないんじゃないのか？」

「姉上の言ったことから察すると、Ｃクラスとの試召戦争は引き分けで終わらせたようなのじゃ。そして今、Ｃクラスは必死で勉強しておるだろうよ。ただワシらを潰す為にだけにの」

見物人の中にＣクラスは代表の小山しかいないことがその証明じゃ。

多分、Ｆクラスの戦力把握や、弱点を探すためじゃろう。彼女以外は自習していると予想できた。

「ワシらがＡクラスに勝つても、負けてもＣクラスは絶対に攻めてくる」

それは確信を持って言えることじゃった。

「そうか……。すまんが、俺の番が来たようだ。行ってくる」

それだけ言って、坂本は霧島翔子と闘いに行った。

正直、ワシはどちらを応援すれば良いのかわからなかった。

そして、Aクラスとの試召戦争の結果が、敗北だったことにどこかで安心したワシがいた……

そのじゅうじつ（視点変更）（後書き）

秀吉が言っになって意見もありそうですね。

坂本の指示とは言え、罵倒の内容を考えたのは秀吉自身なわけで…

…

そのじゆうろく (前書き)

坂本くんには胃薬が似合う

そのじゅうろく

「CクラスはFクラスに試召戦争を挑みます」

僕と小山さん、そして野次馬くん（仮名）はFクラスに来ていた。

「Cクラスが俺たちに攻めて来て何の得になるんだ？ それに、これ以上設備を下げられるのは……」

坂本くんの顔が少し曇っていた。何せ、Aクラスとの試召戦争に負けた今、Fクラスの設備は最悪だ。これ以上下がるのかと疑問に思うほど。

埃っぽい教室からは、カビの臭いも漂っていた。衛生状態は最悪のようだ。仮にも教育機関なんだけどなあ。

まあ、自業自得かと僕は一人納得していた。

「Bクラスに勝てたんだから、Cクラスには簡単に勝てるでしょう？ そしたら、Cクラスの設備を奪えるわよ？」

小山さんはわざとFクラス中に聞こえるように言った。すると、Fクラスの中で、

「Cクラスになら勝てるんじゃないか？」

「俺たちはAクラスとも互角に戦えるんだ、格下のCクラスに負けるわけがない」

「弱いヤツが餌を持ってきたな」

「まさにカモネギ」

「……………」

「こんな設備からおさらばできるのか」

「Ｃクラスには感謝しないとな」

と、Ｃクラスを舐めきった発言ばかりが聞こえた。

……明日にはその言葉が言えないようにしてやりたい。

「……………何か裏があるんじゃないか？」

好条件には何かあると思っっているらしく、坂本くんは冷静に考えていた。また、彼の類はＦクラスの適当な発言を聞いたからか、引きつっていた。

坂本くんの見た目はただのチンピラだけど、ちゃんと考えることはできるらしい。まあ、考えることが悪知恵ばかりだから、今、僕たちが試召戦争を仕掛けるといいう状況になっているのだが。

「裏？ そうねえ……Ｆクラスをぶっ潰したいことくらいかしら。

誓約書でも作るうか？ Ｆクラスが負けても引き分け扱いとし、設備を下げることはないって。あ、もちろん、Ｃクラスが負けた場合は設備を交換していいのよ」

小山さんが坂本くんと交渉をしている時、僕はＦクラスの中を覗き込んでいた。すると、秀吉と目が合う。僕は「につこり」として秀吉を見たけれど、秀吉はすぐに俯いてしまった。あれ、何か後ろめたいこともあるのかなあ。

「それが本音か……………」

「ええ、それだけよ」

それだけ言うと、小山さんは大きく息を吸い、Fクラスに向かって、

「さあ勇気のあり、実はAクラスに匹敵するほど学力も高いFクラスの皆さん。私たちCクラスと試召戦争を行いCクラスの教室を手に入れませんか？」

天使のようでラスボスな笑顔で彼女は告げた。

まあ、実際はただの嫌み。しかしFクラスの普通の人たちは言葉通りに受け取っているようだ。

『やってやるぜえええ!!』

Fクラスの男子ほとんどが同時に嬉々として叫んだのがその証拠だった。

「おいっ、お前ら！　ちゃんと考えろッ!!」

坂本くんが落ち着かせるように言っが全く効果はない。

「それじゃあ、午後から開戦でいいかなあ？」

坂本くんを無視し、小山さんはFクラスに問う。

『もちろんじゃああア……!!』

馬鹿らしいほどに嬉しそうな叫び。

「決まりね。午後を楽しみにしてるわ。さ、行きましょ」

「おいッ、ちよつと待て!!」

坂本くんの叫びを無視して、僕たちはCクラスに戻って行った。

「ねえ、小山さん」

「何かな？」

Fクラスとのやりとりで一つ、疑問があつたのだ。

「どうして、Cクラスを下げてFクラスを持ち上げたの？ 嫌みだつてのはわかるんだけど、Fクラスは嫌みじゃなくて素で受け取ってたよ？」

「ふふ、それ聞いちゃうかにゃあ」

猫なで声の小山さん。普段なら可愛いで済むが、今の彼女だと、腹にどす黒い何かを抱えているように見える。

「もちろん、Fクラスが嫌みで受け取らないことくらいわかってるわよ。ほら、知ってるでしょ？ 私ってかなり性格悪いのよ？」

まあ、うん……否定しない。

「でね、余裕で勝てると思っていた相手にボロクソに潰されたらショックが大きいじゃないっ」

そう言った彼女の顔は心底楽しそうで、今まで見た小山さんの笑顔の中で一番綺麗だった。

「……だって、それくらいしなきゃ、腹の虫が収まんないわよ」

そのじゆつろくつ (後書き)

小山さんは腹黒いよっ

そのじゅうななつ（前書き）

人形は踊る、^{バカ}掌で。

そのじゅうななっ

「ほらほら、もっと頑張つて」

午後から小山さんの立てた計画通りに、Fクラスとの試召戦争は始まった。

戦況は押されている。まだ戦死者は出ていないが、勢いのあるFクラスにジリジリと近付かれている感じがだ。

『小山が見えたぞー！ 突っ込めーッ！！』

遠くからFクラスの声。彼らから小山さんが見えるのは当然である。だって彼女はわざと目立つところで指揮を執っているのだから。窓から急襲されたBクラスの二の舞を避けるために廊下に居るが、後ろへの注意はあまり払っていない。

「ふふ、馬鹿共が近づいてきたわねえ」

全くもって焦っていない彼女。その顔にはただ笑顔。

「でも、まだ攻めないんでしょ？」

「ええ、作戦通りね」

Cクラスの皆はわざと手こずっていた。全員が得意教科ではなく、Fクラスより少し高い不得意教科で戦っている。

自分を戦死ギリギリまで追い込み、とどめを狙って来た相手を、
まだまだ余裕のある仲間が倒す。

その繰り返しで表面上は拮抗状態を保っていた。

それにしても、正面から突っ込んでくるFクラスの人数が多い。
無駄に戦力を投下してるようにしか思えない。

坂本くんは狙ってやっているのだろうか、それともただFクラス
を制御できていないだけか。

後者なら構わない。だけど、坂本くんがFクラスを制御できない
と楽観視すること危険だ。

彼の指揮があつたからこそ、FクラスはAクラスに挑むことが出
来たのだろうか。

坂本くんの賢さを知っているからこそ、小山さんはわざと、後ろ
の守りを薄くさせた。

「そろそろ、来るかな？」

彼女が小さく呟いた。

その刹那……

「ムツツリー二が来たぞッ！！ 後は頼むうッ！！」

野次馬くん（仮名）の叫び、断末魔。

- - Cクラス初の戦死者だった。

野次馬くん（仮名）は自分から、いの一番に囀を志願したのだ。

ムツツリー二と保健で勝負させてくれと。

そして、彼は土屋くんが来たことを知らせるためだけに華々しく
戦死した - - 見てないけど。

「さ、永瀬くん、よろしく。高橋先生もお願いします」

「うん」

「わかりました」

最初から、高橋先生をCクラスは抱き込んでいた。そして、大柄な生徒達の間隠れてもらっていたのだ。

……むさ苦しい男子の中にいさせてごめんなさい。

さて、高橋先生は他の先生よりも召喚フィールドが広い。それを利用する。

「Cクラス、永瀬夏樹。Fクラス土屋くんは英語Wで挑みます。試^{サモン}獣召喚！」

「……しまった」

土屋くんが保健で勝負を挑むより先に、僕が英語Wで挑む。先にこちらが召喚してしまい、さらに土屋くんは既に高橋先生のフィールド内に入っているから逃げられない。

保健で土屋くんに勝てないならば、他の教科で倒せばいいだけのこと。

今のところ、全てが小山さんの作戦通りだ。

「召喚しないのですか？ 不戦敗で補修室送りになりますよ？」

「……仕方がない。……試^{サモン}獣召喚」

高橋先生の声に、土屋くんは渋々と召喚した。

英語 W

Cクラス 永瀬夏樹 130点

V S

Fクラス 土屋康太 67点

デフォルメされた、小さな僕が召喚される。本屋の人がしている前掛けをかけていて、手にしているのは小さな本だった。

「点数によって本の種類が違うのね」

フィールド外にいる小山さんに言われる。

「今は薄い教科書みたいだ」

話しながらも、土屋くんの相手をする。忍者っぽい彼の召喚獣は見た目通り、素早かった。

うん、倍くらいの点数差があるから相手の攻撃を受けても微々たるもの。召喚獣の操作に慣れるのには丁度良い相手だ。

「あまり遊ばないようにね」

「大丈夫。慣れたら直ぐに倒すから」

奇襲してきたのは土屋くんだけなので、僕は安心して集中ができる。

まあ、姫路さん以外ならば、他の人が相手にしても余裕だから気にしてないけど。

「これでよしと」

何分かして、召喚獣を動かすことに慣れたから、土屋くんの召喚獣にとどめを刺した。

自らの手足までとは行かないけれど、ある程度思い通りに操作することができりようになった。

「さ、永瀬くんの勝負をしているうちに、大体引きつけることができたわ」

「それじゃあ？」

「ええ、難敵を一人潰したことだし、楽しい楽しい時間の始まりよ」

嬉々とした小山さんはポケットからホイッスルを取り出し、強く吹く。

戦死して補修室に連行される土屋くんが、小山さんの顔を青い顔で見ていた。

高い笛の音、それは――Fクラスを全力で攻める合図だった。

そのじゅうななつ（後書き）

小山さん頑張る。夏樹は空気。

そのじゅうはちっ (視点変更) (前書き)

初、明久の視点です。

そのじゅうはちっ（視点変更）

「つくしょう!」

Cクラスとの試召戦争が始まり、数十分たった。

「どうしたんだい雄二?」

珍しく取り乱している雄二に僕たちは不安の目を向けている。
前線の報告だと、Fクラスは戦死者を出ているものの、徐々に圧しているようだ。

「今の所順調じゃないか」

何で雄二が焦っているのか僕は疑問に思っていた。

「何を持ってお前は順調だと言っているんだッ!」

雄二はみかん箱を叩き、それはべこりと簡単に潰れた。
隣にいた美波の体がビクリと震える。

「え? そりゃあ、戦死者は出ているけど、圧しているみたいだし。
それに、Cクラスが一度もこっちに来ていない。前線が頑張っている証拠じゃないか」

うん、我ながら完璧な返事だ。もう馬鹿だっって言わせないからね
っ!

「……馬鹿かお前は」

「――早すぎるよッ！！」

「じゃあ、Cクラスに戦死者は出ているのか？ それに、こっちは指揮を逸脱したヤツらが勝手に突撃したせいで半分くらいしか戦力が残っていないんだぞ？」

確かに、Cクラスに戦死者が出たとは須川くんからの報告にはなかったなあ。

それよりも、逸脱ってどんな意味だっけ……

「でも、わざと多く送って、その間に主力が補給テストを受ける作戦じゃなかったの？」

これは雄二が試召戦争が始まる前に言ったことだ。

「だから、指揮を逸脱するヤツがいるとわかっていたから、わざと多く送ってるんだ」

「まあ、みんなCクラスに勝って意気込んでいたしね」

みんなCクラスを速攻で倒してやるって元気に叫んでいた。やる気があるのは良いことじゃないか。

「坂本くんは、そもそも、試召戦争が始まってから、補給テストを私たちが受けていることが間違っていると言いたいでは？」

横から姫路さんの可愛くも冷静な声。さっきまで彼女は古典の補

給テストを受けていて、今は採点中だ。

「ああ、そうだ。小山の嫌みを嫌みと気づかない馬鹿が勝手に了承したせいで、準備が全くできていない」

「え、嫌みって何が？」

小山さんは何か僕たちに嫌みを言ったのだろうか？

「はあ……秀吉、頼む」

「……うむ」

雄二の注文に、秀吉はあーあーと声を調整する。

「さあ勇気のあり、実はAクラスに匹敵するほど学力も高いFクラスの皆さん。私たちCクラスと試召戦争を行いCクラスの教室を手に入れませんか？……これじゃろう？」

小山さんそつくりの声。で、これのどこが嫌みなのだろうか？

小山さんは僕たちFクラスを誉めてくれたんじゃないの？

「わからないのか？ Aクラスに匹敵する学力つてのは、姫路と保健のムツリー二を指している。で、俺たちは今まで、DクラスとBクラスに勝つには二人に頼るしかなかった。単純に言うとな、この二人がいなければFクラスはただの馬鹿の集まりなんだよ」

「Aクラスに勝ったのもその二人だけじゃしの。実質ワシらは二人と坂本の策略でここまで来たのじゃ」

その言葉に雄二はうむうむと頷いていた。何か手柄が全てコイツのなるのは嫌だなあ。

「え？ 秀吉だってCクラスを騙す時、名演技だったよ」

そこで、手柄を分配することにした。別に間違ったことは言っていないから大丈夫なはずだね……

秀吉の、お姉さんを演じたものは完璧だった。だからこそ、CクラスはAクラスに試召戦争を挑んだわけだし。

何故か引き分け扱いになってたのは不思議だけど。

「……その、ワシの演技のせいで、今、Cクラスと試召戦争しているのじゃよ」

が、秀吉は俯いてしまった。

うーん。今日の僕は空回り？

それに、何で秀吉の演技と今の状況が繋がっているのだろうか？

「考えてみる明久。そもそも、Cクラスが俺たちに攻め込んでくるメリットなんか無いだろう？ しかもアイツら、俺たちが負けても教室の設備を下げないとまで言ってるんだぞ」

確かに、Fクラスにはデメリットが一つもない。

「そりゃあ、優しいCクラスが、設備の可哀相な僕たちの為にチャンスを与えてくれたんじゃないのかい？」

「……お前、本当に、馬鹿だな」

「え、ちょっと、何で棄てられた子犬を見るように僕を見るのさ。」

ひつ 秀吉までっ!？」

「お前に説明するのは面倒だし、時間の無駄だ。秀吉、Cクラスには知り合いが一人いるんだろ？ そいつを何とか利用できないか？」

秀吉の知り合い。確か、永瀬くんだっけな？ 先生を装って放送で名前を呼んだのは僕だから覚えてる。顔は知らないけど。

「……無理じゃの。絶対に無理じゃ」

「何でさ？」

「宣戦布告の時、小山の隣に気の弱そうな男子がおったじやろ？
それが永瀬夏樹じゃ」

ああ、ほとんど話していなかったけど、笑顔が可愛くて女装が似合いそうな男の子だった。

「それで？」

「あやつは笑っておったじやろ？ あれはかなり怒っておる。夏樹は怒っていればいるほど笑顔になるのが特徴じゃ。そして、怒っている対象はワシじゃ。だから、利用なんてできぬ」

秀吉の声は微かに震えている。それは、触ってはいけないものに触って、怯えている子供みたいだった。

「そうか……。じゃあ、その永瀬の実力はどれくらいだ？ 小山のそばにいたということは主力のようだが」

「ああ、文系の国語特化型での。理系はワシ並みじゃが、国語だけは姫路より上かもしれん」

姫路さんの上かもしれないってどれだけ高いんだ!?

「じゃあ、理系で挑めば良いか……。ちくしょう、圧倒的に時間が足りねえ。康太が上手くやってくればいいんだがな」

「大丈夫、ムツツリーニは上手くやってくれるって」

「……………」

須川くんの報告で、Cクラスは後ろの守備が甘いのを知ると、一人で行ってしまった。一人の方が身軽で良いらしい。

後に、思えば、それは死亡フラグだった。

『ムツツリーニが戦死！ Cクラスが攻めて来たぞーッ!』

「やっぱりわざとだったかッ!」

Aクラスに挑んだ僕たちは、Cクラスになら余裕で勝てる。

そんな楽観的な考えは煮詰めた蜂蜜よりも甘いことを、僕たちは直ぐに知ることになった。

そのじゅうはちっ (視点変更) (後書き)

馬鹿視点だと説明がやりやすいと知りました。

そのじゆぢぢぢぢ (前書き)

小山さんぱーと

そのじゅっきゅっ

「楽しいわねえ」

ケラケラと笑う小山さん、なんというかステキだった。……悪役的な意味で。

彼女はFクラス男子三人を一人で相手にしていた。僕は彼女の後ろでフィールドに入らない位置に立っている。

小山はAクラスとの試召戦争の時、一度も召喚していないから、多分これが初めての操作になるわけだ。

そう、これは彼女にとっての練習。

「ちくしょう、三人でやってるのにどうして一度もあたらないんだよっ!？」

「Cクラスなんて雑魚なのにッ!！」

「何で俺たちは遊ばれてんだ!？」

口々に言うFクラスの男子達。楽勝だと甘く見ていた人に簡単に遊ばれているのはさぞ苛つくことだろうね。

「はあゝい頑張つて。惜しいつもうちよい!」

……本当に初めて？

そう心の底から思うほど、彼女の操作は巧かった。召喚獣をまるで自分の手足かのように操っている。

「っていつか、この点数差はなんなんだよっ!? 全く聞いてねえぞ!」

しかも、Cクラスが弱いと思ってる彼らに150点以上の差は予想外だったのだろう。焦った言葉を聞いて彼女の笑いは更に大きくなった。

レベル1の彼らが敵が弱いと油断して歩いていた場所、そこはラスボスが潜む穴だったのだ。

「CクラスなんてBクラスを倒してAクラスと戦ったキミたちなら簡単に勝てるでしょ?」

小山さんは嬉々としてFクラスを弄んでいる。

……正直、僕は暇だったので、今の状況を整理することにした。土屋くんを倒し、ゆつくりと進軍し始めた僕たち、バラバラに別れて自由にFクラスを倒していた。

作戦なんてほとんど存在しないと小山さんは皆に言っていた。土屋くんを倒すまでのこと。その後はやりたいようにやらせている。もちろん、それこそが作戦だ。

個々が自分の動きたいように動くことによつて、先生たちを分断させ、Fクラスが利用しにくいようにする。

Fクラスとの実力差があるからこそできる作戦だった。

皆が自由に動いているせいか、あちらこちらでFクラスの断末魔が聞こえてくる。

良かった、皆は順調に楽しんでるみたいだ。

ただ、一つだけ心配事があった。

「小山さん、遊んでて大丈夫なの？」

ゆっくりと玩具で遊んでいる彼女に僕は声をかけた。遊んでいるのは全然かまわないが、時間を無駄に使っているような気がしたのだ。

遊んでいる間に、僕たちの獲物が減ってしまうから。

「大丈夫大丈夫。私たちの目的はFクラスに勝つことじゃないのよ？それに、Fクラス代表のトドメを刺すのは私たちって決めてるでしょ。でも、永瀬くんが言うならお遊びはお終いね。同じ相手をするのも飽きちゃったしい」

振り返った彼女の口元は歪に曲がっていた。笑いが止まらないのだろう。

もちろん、それはツクリワライ。

「私たちの目的はね……」

そこでFクラス男子達の方に向き、襲いかかってきた召喚獣の一体を一撃で倒す。

「Fクラスの……殲滅よ」

笑いは消え、氷のように冷たい声だった。

「……え？」

固まる男子二人。

- -ぱちゅり、と何かが潰れるような音。それは、彼らの召喚獣の首から上が消失する音だった。

「さ、行きましょう。目に入った敵は皆殺しよ」

「うん」

負けた彼らを見ることなく横を歩く小山さん。彼女にとって、敗北した彼らは路傍の石のように取るに足らない存在だった。

そのじゆづきづつ（後書き）

Fクラスから見た小山さんは完全に悪役。

そのにじゅう (視点変更) (前書き)

えふくらすのなげき

そのにじゅうっ（視点変更）

「すまないが……姫路と島田、前線に立ってCクラスを倒してくれ。教科は数学にする」

Fクラスの戦力は既に三分の一未満まで減らされていた。対して、Cクラスは十人程しか戦死していないらしい。

正直僕は、いや、僕たちはCクラスを舐めていたのだ。Bクラスに勝ち、Aクラスとも互角に戦っていたから錯覚していた。そんなことができたのは、雄二の綿密な作戦と、姫路さんやムッツリー二に頼ったからだっただけに。

「わかったわ」

美波が重々しく頷く。Fクラスが圧倒的不利なことを理解した今、一つのミスが命とりになるからだ。

姫路さんは言わずもがな。美波だって数学ならばBクラス並みの実力があるから、きっとCクラスを倒してくれるだろう。

でも、貴重な戦力をどうして分けるのだろうか？

「今、俺たちが固まっていたら、Cクラスの集中攻撃に合って潰されるだろう。姫路がいるからと言っても、人数の力には及ばないかな。Cクラス全員がここに集まる前に、数を減らす」

僕の疑問を読んだかのように雄二が答えた。

「そして秀吉もFクラス数人と共に別行動だ。教科は……古典」

「えっ！？ 雄二、それはどういうことさ？ 秀吉の友人の永瀬くんの得意教科は古典なんでしょ？ わざわざ自殺しに行くようなもんじゃないかッ！」

これには納得ができない！！ 何で秀吉を殺す真似をしなきゃいけないんだ。

僕は雄二に掴みかかったが、それを止めたのは秀吉だった。

「……ワシは囷ということじゃな。坂本とワシを引き離すことによつて、おそらく夏樹はワシの所に来るじやろう。すると、坂本を狙う小山とワシを狙う夏樹が離れるはず。そうということじゃな？」

秀吉は冷静に判断している。補修室行きになることが確定したのに。

「ああ、そうだ。秀吉にはエサになってもらう。半分以上が戦死した今、それくらいしか浮かばない」

雄二だって本当はこんな作戦は使いたくないのだろう。苦虫を噛み締めたような表情だったから。

「それとな、思い出せ。小山は俺たちが負けた場合どうすると言っていた？」

「教室の設備は下げない、ですね」

姫路さんが即座に返す。

「そうだ。誓約書を作ってもいいと言っていた。しかし、現に小山は誓約書をこちらに持って来ていない。この意味がわかるか？」

「口で言っただけじゃから、やろうと思えば無かったことにできる。そしてワシらの教室は更に酷くなる」

今度は秀吉が返した。秀吉の表情はFクラスの中で一番辛そうだった。

……やっぱり小山さんの性格は悪いのか。流石、根本くと付き合っているだけはあるなあ。

「明久もわかったな？ Cクラスに負けられないんだ。だから、何をしてでも勝たなければならぬ」

「うん」

これ以上酷くなったら、姫路さんだけではなく、他の人の体調にまで影響を及ぼすだろう。姫路さんなんかはFクラスで生活することができなくなるかもしれない。

「最後に、俺と明久、生き残りはムツリー二と同じルートで後ろから回る。須川の情報だと、Cクラス全員が前進しているから、ヤツら後ろには誰もいない、がら空きらしい。まあ、普通はわざわざ失敗したことを繰り返すとは考えにくいしな」

そして雄二は一呼吸、生き残りの顔を順に見渡していく。

「さあ、勝つぞー！ 俺たちは最強だッー！」

『おおおおッー！』

Fクラス全員に気合いが入る。僕たちは絶対にCクラスに勝つんだッ！！

それがたとえ心の底では虚勢だとわかっていても、僕たちは、ただ強気に気合いを入れるしかなかった。

「あら、作戦会議は終わったのかしら？」

そのにじゅう（視点変更）（後書き）

いちゃんはおお

そのにじゅういちっ (前書き)

しゅっげきっ!! 小山さん&夏樹!!

そのにじゅうちっ

「あら、作戦会議は終わったのかしら？」

気合いを入れていたFクラスが一気に静まり返った。

僕たちを見て驚いている人もいれば、何が起こったのかを理解できない人もいる。

「みつ見張りがいたはずだぞ！？」

どうやって僕たちがここにいるのかを疑問に思った人がいた。まだ冷静な方だが、声は可哀想なくらい裏返っている。

「見張り？ ええと、一瞬で戦死した後、女子が彼らの口にガムテープを張ると泣いて喜んでいたわよ？」

「うん、嬉々として受け入れてたよね。手も差し出してたしね。あ、それとこの教室にいるのが最後です。他は全滅したと思いますよ」

皆張り切ってFクラスを倒していたからなあ。誰が一番倒すかを勝負していたりもしたしね。怒りを全てぶつけていたのだろう。

もちろん、僕と小山さんはそれには参加していない。だって一番美味しいところをもらえるのだから。他の人の楽しみをとっちゃいけないしねえ。

話しながらFクラスの中を確認する。カビ臭い教室、汚れた床、くすんだ黒板、折れて短いチョーク、そして――みかん箱。

衛生や勉強をできる環境というものをかなぐり捨てた様子だった。確かに、こんな環境に立たされたら大抵の人は死に物狂いで勉強するだろうな。

まあ、衛生状態が悪すぎるせいで、成績を上げる前に体調がギブアップしそうだけど。

「さ、雑談してるのも楽しいけど、無駄な時間はいらないわね。小山友香、Fクラスに古典で挑みます」

「永瀬夏樹も同じく、古典で挑みますね」
にこり、と小山さんは僕を見た。僕も笑って大きく頷いた。

『^{サモン}試獣召喚！！』

僕と小山さんは同時に召喚する。

科目 古典

Cクラス

小山友香 & 永瀬夏樹

218点 541点

小山さんと僕の点数が見えた途端、Fクラスの顔色が変わり、ざわつく。

「おっおいつ！！ 永瀬って奴の点おかしいだろ！？」

「ムツッリーニの保健と変わらないだ！？」

「小山の点もＡクラス下位並みだぞッ!? 相手はＣクラスじゃないかったのか!」

「- Ｃクラスですよ、もちろん。ただ、ちょっと怒っているだけの。」

「あら、かなり高いわねえ」

「小山さんもＡクラス並みだよ。まあ、僕の好きな狭衣物語が中心だったからね。あれは全部読んだことあるから簡単だったよ」

その他、Ｃクラス十五人も一斉にＦクラスに勝負を仕掛ける。彼らの平均は１７０点くらいだろうか。最初から、最後に使うの科目は古典と決まっていたから、皆は古典を集中して勉強したのだ。

ちなみに、てつじん先生と僕が皆の質問に答えたり、大切なポイントを教えたりしていた。

学園は勉強機関であるし、さらに熱心なてつじん先生は勉強のことでだから頼んだら絶対に来てくれるのだ。

それに、生徒が理解できるまで懇切丁寧に指導してくれる。

もちろん、僕だって勉強した。人に教えることは自分の理解を確かめるのにかなり役に立つ。家に帰ってから勉強したしね。

Ｃクラスはまだまだ生き残っているのだが、狭いＦクラスではこれが限界。人数が多すぎたら混乱して同士討ちになりそうなのだ。

余った人たちは戦死した者が出たら順次加わるように教室の外で待機している。

続いて、生き残っているFクラス全員が召喚する。フィールド内にいるのに召喚しなかったら戦わずに補修室行きになるからだ。彼らの顔色は悪かった。

「さ、やりましょうか」

隊列は単純。姫路さんの前に十人、小山さんの守備に五人。そして、秀吉の前には僕だ。

正直、姫路さんを倒したら後は烏合の集が残るばかりである。吉井くんは召喚獣の操作は巧いが、ただそれだけ。彼の点数は僕の数学並みに絶望的だ。

島田さんも理系科目ならば善戦が期待できただろうが、科目は古典である。

これらの情報は全て、小山さんが根本くんから手に入れていた。利用できるものは嫌でも利用しなきゃ、とは彼女の台詞だった。

「秀吉。身から出た錆だから諦めてね。僕たちはFクラスが全滅するまで止まることなんてできないから」

「……そうじゃの。ワシが悪い」

秀吉が申し訳なさそうに俯く。可哀相だなとちよっと思いつつも、Fクラスを全滅させるまでは許す気は全くない。

「それとね、僕が怒っているのは、FクラスがCクラスを馬鹿にしたことだけじゃないんだよ?」

小山さんやクラスの皆には悪いと思うけど、私的な怒りがあった。

「……？」

「――優子の振りをしたことだよ。秀吉にはわからないだろうけど、Aクラスの人たちが誤解を解くまで、優子はCクラスの皆から色々と言われたり、思われたりしてたんだよ。全く関係がない悪口さ。秀吉も嫌でしょ？ 自分の知らない内に自分の悪口が広まってるなんて」

そりゃあ、いきなり来た人に散々馬鹿にされたら誰だって怒る。僕だって、もし優子に扮した秀吉が馬鹿にした瞬間を見たら、押さえられない。もちろん、優子じゃないと理解した上の怒りだ。

「……すまぬ」

「うん、謝っても今は許さない。だから――バイバイ」

そして、僕は無抵抗な秀吉の召喚獣を一撃で葬った。

そのにじゅうちっ（後書き）

夏樹がやっと主人公っぽく。

優子がやっとヒロインっぽく。

そのにじゅうにっ (前書き)

Fクラス批判が多少ありますので、苦手な方はバックをお願いします。

そのにじゅうじつ

秀吉を倒した後、僕は小山さんに加勢する。Fクラスで生き残っているのは、坂本くん、吉井くん、姫路さんの三人だけになった。Cクラスも姫路さんに大分削られて、小山さん、僕、その他五人にまで減っている。

「永瀬くんも終わったことだし、そろそろ勝負をつけましょうか」

小山さんが吉井くんの召喚獣を避けながら呟いた。どうやら僕が終わるまで待つてくれていたらしい。

「どうしよう雄二！？ 永瀬くんが戻ってきちゃったよ！！」

「どうすればいいか自分で考えやがれッ！！ 元々、お前らがやるって勝手に決めただけじゃねか！！ そのくせ俺に全て押し付けんじゃねエ！！」

「おっ落ち着いて下さい！」

Fクラスの生き残りが仲間割れを起こしかけていた。

姫路さんが二人を抑えようとするけど、彼女の点数だって半分未満に削られている。

一方、小山さんと僕の点数は一点たりとも減っていない。

今の内に襲えば確実に倒せるけど、そんな気も起こらないくらい
興奮めだった。

「あらあら、無様ねえ」

確かに、今のFクラスの姿は無様としか言いようがない。こんな
クラス相手に僕たちは馬鹿にされたのかと改めて嫌悪感が募った。

「小山さん、もう終わらせよ。見てて可哀相になってきた」

「そうね、さつさと終わらせて、早く教室に戻って紅茶とクッキー
でも食べたいわね。それに、ここは余りにも汚いわ」

僕たちはもう、飽きていた。Fクラスのこんな姿を見たら、今ま
で相手にしたのが馬鹿みたいに思えてきたのだ。

こんな言い方は嫌だけど――所詮Fクラスだった。

怒りの感情はいつの間にかに消え、憐れみに変わっていた。

「馬鹿にしないでくださいっ!!」

突然姫路さんが叫び、一気にFクラス内が静まり返った。

「はあ。馬鹿にするなって何が？」

小山さんは大きな溜め息を一つ。

「私たちだつて頑張っているんです！それに、大好きなクラスを
無様って馬鹿にされて怒らないわけがありませんッ!!」

姫路さんは顔を真っ赤にして叫んでいた。綺麗な顔が台無しにな

っている、まあ、彼女には全く興味ないけど。

真剣な彼女の様子に感化されたのか、吉井くと坂本くんはいがみ合いを止め、真っ直ぐと僕たちの方を向いた。特に、吉井くんの目にはやる気が溢れていた。

でも、姫路さんの言葉は――禁句。

「……静かになさい、この薄汚い豚が。話しかけんじゃないわ。豚臭いんだよ」

「……え？」

ギリギリと小山さんが拳を握る音が聞こえたような気がした。

「先に馬鹿にしてきたのはFクラスでしょう。まあ、心の綺麗な姫路さんには、木下くんが何を言ったかまでは知らされてないんでしょうね。内容を聞いてちゃったら、きっと貴重な戦力に影響が出るしねえ、姫路さん、木下くんが言ったことを一言一句盛らさずに復唱してあげましょうか？」

くすくすと笑いながら小山さんは話している。無知な子供をあやすように僕には見えた。

吉井くと坂本くんの顔色が一瞬で土気色に変化する。さっさまでやる気だった吉井くんの変わりようは滑稽だった。

そして、姫路さんが何か答えるよりも早く、小山さんは大きく息を吸う。

「静かになさい、この薄汚い豚どもッ！！ 話しかけないで！ 豚臭いわッ！！ 私ほね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ あなた達なんか豚小屋で充分だわッ！！」

聞き終えた姫路さんの顔色は、今や吉井くんたちと同じだった。

「ねえ、姫路さん。あなたAクラス戦でFクラスが大好きだから頑張れるって言ったわね。あんなことを言うクラスを好きになれるの？ それに、私だってCクラスが好きなのよ。たかが、一、二週間しか過ぎていないけどね……」

「今度こそ無駄話はお仕舞いね。あ、そうそう、あなたたちが負けたからって設備を下げたりしないわ。だって無様なもの」

さ、皆お疲れ様。と、小山さんはCクラスの方を向いて、微笑んだ。

そして、Fクラスとの試召戦争は、Fクラスが全滅で終えた。

そのにじゅう三 (後書き)

ひとくぎりっ！！

さて、言い訳を活動報告にいたしますので、気が向いたら読んでください。

そのまじりぬいれとつ（拒絶せ）

ひねひねの世の世の世の世

そのにじゅうさん

「明日から私たちは出張に行くからね。その後、ついでに旅行もしちゃうから。父さんは先に行っちゃったわよ」

夕食時、いきなり母はそう言った。

「え……？ 母さん、いきなり？」

Fクラスの試召戦争が終わった後、クラスで一度集まり、小山さんの話を聞いたら直ぐに解散した。

打ち上げを行うという話も出ただけど、Fクラス戦の為に徹夜で勉強したという人が大半だったり、Fクラス戦で頑張ったせいか疲労が溜まったので、元気のある人だけがカラオケに行くことになったのだ。

もちろん、僕は徹夜組だったし、帰ってから本屋を手伝わなければならなかったので、参加しなかった。

「一昨日決まったんだけどね。ほら、夏樹が話しかけちゃいけない雰囲気出してたじゃないの。というわけで、木下さん家に泊まったし、家に誘ったりしなさいな。もちろん、一人でまったりするのもいいわね」

まあ、自由にしなさい、と母は言う。

僕のことを気にかけてくれるのは嬉しいけど、お店に関する重要

なことは言って欲しかった。

「じゃあ、お店はどうするの？」

「三日間の臨時休業よ。バイトの子たちにはもう伝えてあるからね。あ、気が向いたら普段できない場所のお掃除とかやってくれるかしら」

家の書店は学生に便利のように、朝6時から開店し、夜10時に閉店する。だから、休業日とかじゃないとどうしても手に回らない部分というものがあるのだ。

「掃除するのはいいけど、一人じゃ全部やるの無理だよ？」

掃除するのは嫌いじゃない、だってお店が綺麗なのを見るのは気持ちが良いから。

僕が疑問を投げれば、母はふむ、と口元に左手をあてる。考える時の癖である。

「そうね……。じゃあ、暇そうな子に手伝ってもらいなさいな。木下さん家の優子さんなら、小説を何冊か渡してあげるのもいいわねえ。秀吉くんなら演劇関係かしらね。もちろん、アルバイト代も出すわ」

明日は土曜だから学園は休み、当然日曜日も。だから、誰かを誘うには丁度いいかもしれない。

ついでに、母が優子の趣味を把握していることはある意味当然だった。

普段、優子はネットで小説を買っているけど、たまたまそこでは売り切れていたのが、家の書店にはあったのだ。

で、その小説の内容がアレだったのだ……

ちなみに、読まず嫌いは駄目かなと思って、優子のオススメを一冊読んだけど、予想を裏切らず、趣味に合わなかった。

そりゃあ、一応男子な僕に、あの内容はねえ……無理でしょ。

「わかった。何人かに頼んでみるよ」

「じゃあ、よろしくね。食べ終わったらいつも通り洗淨機に食器を入れるのよ」

僕はまだ食べている途中だけど、母はとくに食べ終えていた。しかも、僕より多い量わ僕の半分未満の早さで食べ終えるのだ。

「わかってる」

「じゃあ、明日早いからもう寝るわね。おやすみなさい」

「うん、おやすみなさい」

頭に浮かんだのは四人だった。それはもちろん、優子、秀吉、小山さん、久保くんだった。でも、小山さんと秀吉を同時に呼んで大丈夫かな？ まあ、聞くだけ聞いてみよう。

夕食を食べ終え、洗淨機にセットしてスイッチオン、あとは放置。

携帯を取り、優子にかける。

単調な電子音が五秒ほど鳴った後、優子の声が聞こえた。

『優子？ 明日と明後日、書店のアルバイトしてみない？ もちろん、バイト代は出るし、優子の好きなジャンルの新作も渡すよ』

まずは優子の興味があるもので釣る。

- - 簡単に釣れた。

『うん、内容は掃除だよ。明日から両親が出張で、書店を三日間臨時休業にするんだ。で、その内に普段手に回らない部分をつてことだよ』

針は喉奥まで刺さっているので、簡単には抜けない。まあ、優子は乗り気だ。

『あとは、秀吉と小山さんと久保くんを誘う予定だよ。え？ 霧島さん？ うん、優子が誘ってくれるなら大歓迎』

話はトントン拍子で決まった。優子が秀吉にも聞いたところ、秀吉来るようだ。

『じゃあ、明日の10時、よろしくお願いします。あ、昼食と夕食は僕が作るからね』

ついでに、優子と秀吉が泊まりにくることも確定した。

その後、小山さんは予定が入っているからパスで、久保くんと霧

島さんは手伝ってくれることになった。

「明日から楽しみだなあ」

ぼふんとベッドに倒れ込みながら、僕は小さく呟いた。

そのにじゅうちゅう（後書き）

おりじなるすと〜りい〜のは〜じ〜ま〜り〜

夏樹と優子がやっつっつとメインに。

そのだじゅうよん (前書き)

ひさびさの更新です。申し訳ありません。

そのにじゅうよん

「おはようございます。今日と明日、よろしく願いしますね」

店内、レジの前にて僕は皆に頭を下げていた。誰一人時間に遅れることなかったから、順調に始めることができそうだ。

集まったのは予定通り、久保くん、木下姉弟、そして霧島さんである。

優子がかかなり眠そうだけど、まあ、大丈夫だろう。

今日は天気は良いし、暑くもない。掃除に適している。

「じゃあ、何から始めるんだい？」

「うん、午前中は蛍光灯の埃をとるのと、窓拭きをお願いします」

男子は蛍光灯の埃とり、女子に窓拭きを頼む。蛍光灯は天井についているのだから、女子にやってもらうのは、アレだ。

まあ、掃除だと知ってスカートをはいている人なんていないけど。皆ジャージのように汚れても問題ない服装である。一応、汚れにくいように前掛けも渡している。

もちろん、彼らが来た時は普通の私服で、各自が掃除用に着替えを用意していた。

ついでに優子と秀吉は家に泊まるから、やや大きめのバックを持ってきている。

「これが窓拭き用の洗剤と雑巾、ゴム手袋。高いところ用の脚立はあそこに。あ、蛍光灯は弱まっているのも交換するからね」

掃除の基本は上から下。下からやって上から落ちた埃を掃除するなんて無駄にも程がある。

「それじゃあよろしくお願いします。疑問点などがあれば、すぐに聞いてくださいね」

「わかった」

霧島さんが頷くと、彼女以外が続いて頷き、掃除が始まった。

霧島さんはバイト代より、本を求めてここにきたのだ。一番に来た彼女は、バイト代の分を全て本で下さいと言った。

その本の名前は……まあ、坂本くん頑張れ。と、思いたくなるようなもの。

全部言うのは坂本くんが可哀想なので、一つ、二つにマシなものしておこう。

『私だけの彼、蠱惑のレシピ集』

『捕らえた彼は逃がさない、素敵な縄の使い方』

全然マシじゃないね、うん。

というか、蠱惑とか縄だとか怪しすぎる。在庫を確認した時、こんな怪しい本があるなんて自分でも驚いた。

ちなみに、

秀吉は『男らしさを出す為の12の試練』ゴットハンド

久保くんは『おとこのこの魅力』

優子は『約束の薔薇園』

結論、まともな人なんて一人もいやしない。……わかりきっていたんだ。

清々しいほどに、誰も趣味嗜好を隠すことをしない。まあ、人の好きなことはまさに十人十色だ。特に興味もないから、気にすることもないけどね。

ただ……久保くんの視線にはどう対処するべきなのかをたまに迷うのだ。

自惚れと思うだろうか？ や、「永瀬くんも……イケるかも」と、こんな呟きが以前聞こえてしまったのだ。

久保くんは良い人だ。数少ない友人である。実際、僕が「友人」と思える人は片手ので足りる。「知り合い」「クラスメート」と言葉を変えれば増えるだろうけど。

つまり、僕の交友関係は狭く深くが基本なのである。自分で言うのもアレだけど、「依存」だと言い換えて問題ない。

確かに、久保くんは「男の子」にも興味がある変わった人かもしれない。たまに僕に熱っぽい視線が送られることもある。

だけど、それで縁を切ろうとは思えないのだ。
答えの浮かばない迷いに僕の思考は沈んでいた。

「永瀬くん、あれは換えた方がいいのかな？」

「っ！？」

びっくりっ！ 隠し事が見つかった子供のように僕は驚いた。久保くんのことを考えている時に、本人に呼ばれる。驚くに決まっている。

ああ、そうだ、今は掃除中だったのだ。

「えっと、あれかな？ うん、換えた方がいいね」

なんとか気を取り直して問うた。

彼の指先には点滅した蛍光灯が一つ。

「わかった。僕の方が永瀬くんより高いから、僕が換えるよ。脚立を支えてくれるかな？」

「待つて、換える時には電気をいったん切らなきゃいけないから、他に換える照明があるなら切る前に印をつけたいんだ」

目印には照明真下の床に赤のテープを貼る。はがしやすいように端っこはちよつと折るのだ。

「換えた方が良さそうな場所には、テープ貼ってね。僕は秀吉にも伝えに行くから。よろしくお願いします」

「ああ、わかった」

彼にテープの貼り方を指示した後、僕は秀吉のいる方へ向かうことにした。

そのにじゅうよん (後書き)

私はバカテスの男キャラで久保くんが一番好きなんです。

そのにじゅう三 (前書き)

かなり短いです。そして、少々ばらのかおりが……

そのじゆゑに

――さすり。

「ひうつ!! なっなんじゃ!？」

足音を消して秀吉の背後に忍び寄り、首筋を優しく一撫で。
聞こえたのは彼が目指す「漢」には全く似合わない、とっても可愛らしい悲鳴だった。

今の秀吉は棄てられたばかりの子犬のように怯えているみたいだ。
自然と笑みがこぼれた。

「ふふ、大成功っ！」

にやり、いや、にたにた。

「いきなり何をするかつ!？」

真っ赤になる秀吉も可愛い。

「いたずら」

「それはわかっておる!」

「え」

「何故にやったっ!？」

耳や首まで熟したトマトみたい。

「やりたかったから」

もちろん即答。

「お主……」

秀吉からいたずらされることはあっても、僕から秀吉にするのはこれが初めてだったりする。

がつくりと肩を落とし秀吉は枝垂れ桜のように綺麗だった。これからはいたずらをしてうなだれる秀吉を楽しもうと小さな決意。

「秀吉だつて悪いんだよ？」 せっかく来てくれたのに、僕とほとんど顔を合わせないんだもん。そりゃ、いたずらをしてでも気を引きたくなるよ」

そう、せっかく来てくれたのに、秀吉はずっと俯いてたのだ。秀吉は久保くんや霧島さんとは関わりがないだろうから、優子が僕と話さない限り居心地が悪いと思う。

しかも、先日は優子の演技をしてCクラスを騙し、その騙されたCクラスには僕が所属している。つまり、掃除アルバイトに参加したはいいものの、どうすればいいかわからない状態。

誰かに話しかけようにも全員と気まずいのだ。

「……すまん」

「ほらあゝ、俯かないの。僕はもう怒ってないよ。前の試召戦争ですつきりしたからさ。だから、秀吉もいつまでも気にしなくていいよ」

――ぽふり。

秀吉の頭を軽く叩く。

僕の方が小さいから、秀吉を下から見上げる形になってしまう

「うん……」

「さ、掃除しよっか」

そのにじゅうじつ（後書き）

おまけ。

木下優子は震えていた。それは悲しみや寒気ではない、歓喜のものであった。

目の前というほど近くはないが、二人の横顔がはっきりと見える距離に彼女はいる。

そこで見たものとは、抱き合うくらいに近い距離にいる二人の男の子。片方は自分と瓜二つな弟であったが、弟の顔は脳内で削除し、お気に入りな別の顔で再構築。全く問題はない。脳内変換に慣れている彼女には簡単なことである。

もう片方は彼女好みの幼い顔つきをした、弟のように思っている子だった。

木下優子にとって驚くべきことに、夏樹が――気弱で自分の一歩後ろを懸命に追ってきている永瀬夏樹が、弟にいたずらし、その後、ぽふりと頭に手をのせたのだ。

気まづかった二人が仲直りしている。

その『普通の人』から見れば微笑ましい光景は『木下優子』とい

う人物が見たならば、それは『弱気攻め』という『ジャンル』と変わる。

カメラがあつたならば撮りたかつた。しかし、今は持っていない。こついう時にFクラスのムツツリー二ないればいいのにと切に思った。

が、いくら思つても写真に収めることはかなわない。ならば――脳内に保存するまで。

- - ああ、いいわあ。

ぼそりと呟いた声は隣にいる少女の眉間に小さな皺を浮かべさせた。

古典おもしろ知識? - - ただの場つなぎともいう。(前書き)

特に読まなくても問題ありません。

ただ、読んだら古典の知識がちょっと増えるかも？

古典おもしろ知識？ - - ただの場つなぎともいう。

『紫式部は清少納言が大嫌い！？』

それを示す文章に以下のものがあります。

「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。

さばかりさかしだち、真名書き散らしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。

- - 中略 - -

そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよくはべらむ」

『紫式部日記』

意識

「清少納言は高慢な顔をして本当に嫌な女です。

利口ぶり、いかにも学問（漢学）に優れているようなことを書いているけれども、よく見れば、まだまだ未熟なことばかりです。

- - 中略 - -

そのむなししい人の最期は、どうして良いことになりましたか（いや、酷いものになります）」

と、このように紫式部は清少納言を批判しています。

しかし、実は彼女たちは一度も会ったことはありません。

何故なら、紫式部が中宮彰子に仕え宮中にいたのは、清少納言が宮中から去った後のことなのです。

では、どうして紫式部は会ったことのない清少納言をこんなに批判していたのでしょうか？

それは「妬み」だと言われています。

清少納言は明るく、男の人とよく交流ができる華やかな人物でした。

一方、紫式部は内気（根暗）であり容姿も美しくなく（これらには諸説ありますが）、引きこもりな人物でした。

紫式部は自分にはないものばかりを持つ清少納言を妬んでいたと言われています。

そんな紫式部だからこそ、源氏物語で自分の理想の人間（光源氏）を書いたのかもしれませんがね。

ついでにもう一つ。

『貴族の性格は悪かった！？』

まずは紫式部について簡単な紹介を。

紫式部は平安中期の人物で三十六歌仙の一人です。夫、藤原宣孝の死後、一条天皇の中宮（天皇の妻）彰子に仕えました。

彼女の作品に「源氏物語」と「紫式部日記」があります。

「紫式部日記」の表現から察するに、彼女は内向的でありながらも、強い自己意識と鋭い批評意識を持ち合わせた人物です。

さて、では何故貴族の性格が悪かったと言えるのでしょうか？

その理由は『紫式部日記』の記述に、

「はだかなる人ぞ二人ゐたり。ゆげひ、小兵部なりけり。（盗賊に衣服を奪われて）かくなりけりと見るに、いよいよむくつけし」

意訳

「裸である者が二人うずくまっている。それはゆげひと小兵部であった。（盗賊に衣服を奪われて）このような状態になったのだとわかると、よりいっそう気持ちが悪い」

「むくつけし」という言葉には「気味が悪い」「恐ろしい」「無骨・無風流だ」という意味があり、主に『得体の知れないものに対する不気味、恐ろしさ』を表現する時に使います。

また「むくつけし」には『貴族に理解し難いみすばらしい田舎人』という意味合いが含まれます。

貴族にとって、貴族や僧以外の人間は「何かよくわからない、得体の知れないもの」という価値観がありました。

つまり、引用した文のイメージは「汚らしい者が醜い姿を晒している。ああ気持ち悪いものだ」となります。

これは引用の「紫式部」だけの性格が悪いのではなく、貴族以外は気持ち悪いものという思想があつたのです。

もちろん、全ての貴族がそうではありませんが……

ついでのでついでっ！

「源氏物語」の主人公「光源氏」を現代風に紹介すると……

金持ち（天皇家の元一員）

超絶イケメンなオレ様人間。

勉強、スポーツ、絵、歌、楽器に精通。

性格は悪い（美しい女性には優しい、しかし容姿の悪い女性を侮蔑する和歌を詠む）

女にモテまくるリア充。

後先考えずに女に手を出す。

マザコン（父親（天皇）の妻（源氏の義母、実母に容姿が似ていた）に手を出し妊娠させた）

ロリコン（実の娘・六条御息所との娘・にも手を出そうとした。しかし、六条御息所に娘にまで手を出すなと釘をさされて断念）

こんな感じです……。

現代の人から見れば『人間のクズ』ですが、そんな彼も当時の人からは『理想的な人間』なのです。

引用＆参考

『紫式部日記』

『コゴタロウの2次&私大古語・用法・文法300』（河合出版）

古典おもしろ知識？ - - ただの場つなぎともいう。（後書き）

私は源氏物語では六条御息所ろくじょうのみやすんどころという女性が一番好きです。

他の女に目移りばかりする光源氏に悪霊扱いされる（実際に目移りすり光源氏の浮気？相手を呪い殺しました）可哀想な女性です。性格を現代風に言えばクーデレ・ツンデレ・ヤンデレ。

ついでに、古典の勉強をしたいけれど、単語を何で覚えたらいいかわからない方は、河合出版の『コゴタロウ』をオススメします。解説が充実していて一番使いやすく、応用が利きます。

あ、私は河合塾の回し者じゃありませんよ、代ゼミの浪人生です
しね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1633u/>

バカとテストと本屋さん

2011年11月17日01時34分発行